

歯学部ニュース

令和2年度第2号（通算138号）

特集 歯学部卒業おめでとう
歯学部学生の様子
コロナ禍の授業

目 次

特集 1 歯学部卒業おめでとう	1
学部長から 前田 健康	
副病院長から 小林 正治	
卒業生から 石坂 瑠音・相馬 歩・南山 春菜・林 唯香・岡田真里奈	
令和2年度 歯学部卒業生名簿	
大学院修了にあたり	10
山田 茜・金子 千尋・竹内 陽香・増澤 美有	
令和2年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名	
令和2年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名	
臨床研修修了にあたり	17
小林 由奈・高田 翔	
総務委員会だより	19
前田 健康	
特集 2 歯学部学生の様子	25
網塚ひかり・橋本凜之輔・成之坊有香・高橋 勇介	
石垣 裕理・川上 彩菜・小林 花音・阿部 円香	
部活動紹介	33
バレーボール部 後藤 崇・NEXUS 石貝 聡美	
特集 3 コロナ禍の授業	35
櫻井 拓仁・山崎 学・長谷川陽子・大内 章嗣	
早期臨床実習を終えて	42
井上 嘉・渡邊 琢巳・兼田 真那・富樫 奈央	
ポリクリを終えて	46
清野 貴仁・遠山 有純	
素顔拝見	48
阿部 達也・北見 公平・齋藤 大輔・花崎 美華・村上 和裕	
留学報告	53
山田友里恵	
留学生紹介	55
Jorge Eduardo Saez Chandia	
退職によせて	57
高木 律男・山崎 和久	
学会受賞報告	61
前川 知樹・山崎 恭子・吉田 謙介・野上有紀子・小山 祐平	
技工部だより	66
川島 美咲・藤石 美穂	
新潟歯学会報告	68
辻村 恭憲	
同窓会だより	69
野内 昭宏・春山 海帆	
ミニコラム	71
歯学部を支える方々 近藤 正一・五十嵐未来	
教職員異動	73
編集後記	75



卒業を祝して

歯学部長 前田 健康

歯学科第51期生の皆さん、口腔生命福祉学科第14期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日めでたくご卒業される皆さんに、歯学部教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、保護者をはじめご家族の皆様におかれましては、今日の卒業の日を無事に迎えることができましたことを心よりお祝い申し上げます。

2020年は新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大により、大学教育に大きな支障をきたしました。特に、歯学部教育の総仕上げといえる臨床実習、現場実習の中断・縮小をもたらし、大変な心配と迷惑をおかけしました。このような中で、卒業生の皆さんは私ども新潟大学歯学部が卒業生に求める能力を獲得し、本日、学士の称号を与えられ、この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、福祉職、行政職、大学院への進学等、さまざまな道に進まれます。各人の進む道は異なるものの、歯科医学・医療、口腔保健・福祉に携わり、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

新潟大学歯学部が設置されて半世紀を超えましたが、この間、歯科界を含め、社会状況は大きく変化し、また変化し続けています。2021年から先の日本の将来はどうなるのでしょうか？令和3年1月4日付の日経新聞に「2021年から始まる日本」と題する論説記事（芹川洋一）が掲載されていました。それによると、「日本の近現代史をひもとくと、15年周期（昭和後期の社会学系の識者による）または25年単位（吉見俊哉著「大予言」）で、時代が区分けされるといいます。その起点は1945年の終戦であり、2020年が戦後75年で区切り

の年、そして今年2021年は76年目にあたります。筆者はこの2021年は新しい時代を切り開いていくための始まりの年になると考えておきたい」と稿を閉じています。今は大変なときですが、皆さんが卒業し、社会にはばたくこの2021年は新たな時代の始まりと考えましょう。

大学を出てから社会人としての学びの時間は40年以上に及びます。平均寿命が延びる中、学びの時間はますます増えていきます。皆さんが大学で学んだ4ないし6年間は人生の学びの時間の10～15%にしかありません。現代は厳しい競争社会です。社会は皆さんのさらなる努力による社会への貢献を求めています。これからの努力が皆さんの人生・将来に関わってきます。歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめながら、プロとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。皆さんが卒業する新潟大学歯学部の運営は国民の税金により行われているといっても過言ではありません。タックスペイヤーである国民は皆さんに対し、常に幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感を求め続けます。また専門的知識や技術を維持・向上させる責任も求めるため、皆さんには常日頃の精進が不可欠となります。さらにはウィズコロナ、ポストコロナの新しい生活様式、社会スタイルの中でも、皆さんが社会から認められるために、今日の卒業式の日、これからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。

政府は、狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、我が国が目指すべ

き未来社会Society5.0を提唱しています (https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html)。Society 5.0の目指すところは、IoT (Internet of Things) や人工知能 (artificial intelligence : AI) を活用して、これまでの情報社会 (Society 4.0) における少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などのさまざまな現代社会の課題を克服することです。また、地域といった国内だけでなく、広く巨視的な観点をもって活躍をお願いします。すなわち、グローバルな志です。グローバル化への対応は単に英語でコミュニケーションをとることだけでなく、重要なことは異文化、自分と異なる価値観を持つ人達の理解、すなわち多様性 diversityの理解です。グローバル化が進む多様性の時代で活躍するために必要なのは、異文化適応性、言語能力、法令遵守、そし

て専門能力といわれています。皆さんのこれからの活躍には、専門能力を常に高め、維持することが不可欠なことはいうまでもありません。

本日、新たな夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、私ども教職員一同はこれからも応援していきます。卒業する皆さんには、折を見て母校を訪ね、また生涯の学習の場として、これからも新潟大学歯学部を積極的に活用していただけるように願っています。皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部はすばらしい教育資源を有し、国内外から高い評価を受けています。私ども教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能、態度を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、活躍して下さい。皆さんの今後の活躍を大いに期待してします。





卒業を祝して

医歯学総合病院 副院長 小林 正 治 (歯科担当)

歯学科第51期生ならびに口腔生命福祉学科第14期生の皆さん、卒業誠におめでとうございます。皆さんが歯学部での課程をすべて修了され、晴れて学士の学位を授与されました栄誉をここに称えますとともに、これからの希望に満ちた未来に対して心から祝福を申し上げます。また、この日に至るまでの長い年月、卒業生を支えてこられたご家族・ご親族の皆様も、たいへんお喜びのことと存じます。

皆さんは、本学に入学した時の夢や想いを覚えていますでしょうか。卒業を迎えた今、今一度皆さんのこれからの夢を思い描いてください。医療人として、どんな人生を歩んでいきたいかを考えてください。大学での学びを通して、皆さんは物事を考える視野の広がりや知識の豊かさ、正しい判断力や理解力が養われて、人間としても大きく成長したものと思います。医療の進歩は日進月歩です。過去の常識が非常識に変わることもあります。皆さんが医療人としてさらに大きく育つためには、思い描いた将来像を目標として、これまでに得た知識や技術を基礎として、その上に何を積み重ねていくかが勝負になります。

われわれが直面している問題の多くには、明確な答えがありません。解決への対策を考える際にも、複数のアプローチ法がある場合もありますし、これが正解だといえる答えのない問題もあります。現在、地球上の至る所で、感染が拡大している新型コロナウイルスもその典型例ではないで

しょうか。1年余り前に始まったコロナ禍は、依然として収束の気配すらありません。皆さんも、日常生活から大学での授業や臨床実習に様々な制限がかけられて苦労した1年であったと思います。われわれ教員も、教育のレベルをできるだけ維持できるように対応してきたつもりですが、難しい対応を迫られた1年でした。このような未知の問題に対応する際には、これまでに蓄えた知識を基にして問題の原因を探り、広い視野から問題の解決策を考える知性が求められます。現在、解決策の一つとして、様々な研究機関や製薬会社によってワクチンや治療薬が開発されていますが、収束までもう少し時間がかかりそうです。しばらくは、医療の現場でも状況に合わせた難しい対応を求められると思います。また、「コロナ後」の世界がどのように変わるのかも、予測が難しいところです。

皆さんは、そのような難しい時代に向かって、これから羽ばたこうとしています。新たな時代を生き抜き、そして光り輝き続けるためにも、皆さんには知的好奇心を失うことなく、医療ニーズの変化に的確に対応できるよう、一步一步努力を重ねていただきたいと思います。新潟大学歯学部ならびに医歯学総合病院歯科診療部門は、皆さんの医療人としての人生の道標となるよう、これからも支援をいたします。大学から巣立つ皆さんが、様々な分野で活躍されること心より願っています。期待しています。頑張ってください。

卒業生から

卒業にあたって

歯学科6年 石坂 瑠音

6年間、中学高校を足した年数を大学で過ごしたと思うと、とても長い日々だったと思います。2020年大晦日の紅白歌合戦で、嵐が活動休止を迎えました。小学校の頃から行事の際には必ず嵐の歌があったので、私達の青春の1つに幕が降りたというか、なんだか大人になったなあと、そんな気持ちを感じながら、6年間を振り返っています。

印象深い思い出といえば、6年生の大半は臨床実習と答えるのではないのでしょうか。

5年生半ばからの臨床実習は、私にとっても最も濃い1年でした。その中で私が得られたものは、本当に大変なときに手を差し伸べてくれる友人の存在でした。私が追い詰められている時、自分だって大変なのに心を砕いてくれる友人に何度も救われました。一緒に泣いて笑って、そうやって前を向いてこられたのは友人のお陰です。本当にありがとう。

そういえば、6年生の私の誕生日の時は、誕生日だと言うことも忘れるくらい忙しくて大変でした。私が一区切りつくまで皆がじりじりと待ち構えてくれていて、申し訳ないやらありがたいやら、ちょっと可笑的いやら。お祝いしてくれて、とても嬉しかったです。プレゼントの100%遮光の日傘には、これからもたくさんお世話になる予定です。大切にしますね。

先生方にも、大変お世話になりました。授業、診療、研究と多忙の中で、私達の診療の指導も熱心にして下さいました。学ぶことばかりで、5年生までの教科書的な知識が急速に立体的になり、自分の成長を感じられる1年でした。

本当にありがとうございました。

臨床実習に協力して下さった患者さんには、診療の時間がかかったり、スムーズに行かなかったりと、ご迷惑をお掛けしました。私が初めて受け持たせていただいた方々のことは、絶対に忘れません。診療に協力していただいて、本当に感謝しております。ありがとうございました。

そして、私が歯学部を目指すといった時、応援してくれた母へ。一人暮らしをすることになって、本当にこの子は一人で生きていけるのだろうか、多大な心配をかけたと思います。私も心配でした。でもなんだかんだ生きてこれました。貴方の娘は意外と逞しく育ったようです。これからもお世話になると思うけど、大学生活を支えてくれてありがとう。お陰で無事に卒業することができます。

COVID-19の感染拡大によって、生活は様変わりしました。これから先も、社会が、生活が、どうなるか分かりません。生きているというのは、苦しいことに囲まれています。だからどんな道を選択をしても、毎日生きて、生き抜いて、1歩足前を出して、進んでいきましょう。

卒業おめでとう。新しい環境に踏み出す私達が、多くの幸せに出会えますように。



誕生日の時の写真（筆者は手前中央）
写真撮影時のみマスクを外しました

6年間を終えて

歯学科6年 相馬 歩

2020年、世界中に蔓延した新型コロナウイルスにより、私たちの6年目は大きく影響を受けました。臨床実習は4月から約3ヶ月間中断し、この先どうなるか誰もが分からないという不安の中、時間が経過していきました。「普通のこと」が制限される日々は、生きづらい毎日でした。しかし、このような状況の中で、改めて気づけたことがあります。当たり前だと思っていることにもっと感謝するということです。意識を変えたことで、臨床実習再開後、今まで以上に将来の歯科医師像を考えながら、一つひとつの勉強と実習を積み重ねることができたと思います。面白い！もっと学びたい！と思えるような分野が増えて、自分の中での選択肢の広がりを実感できました。患者さんのQOL向上に貢献できる歯科治療を自ら経験できたことは、私にとってはとても印象深く残っています。「好きなものをたくさん食べられるようになった」と笑顔で語ってくださった患者さんとの会話は一生忘れることはありません。また1～5年生までの勉強の蓄積の大切さを実感しました。特に解剖学や生理学といった基礎系の知識が臨床とリンクした時、歯学の面白さを痛感しました。後輩にメッセージを送るとしたら、「今から勉強を頑張ると、最後の臨床実習がより充実したものになるよ！ファイト！」です。また6年間の集大成としてこのような経験ができたことは、多くの先生のご尽力があってこそ成立したことです。貴重な機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

勉強だけでなく、学生でしかできないことを全力で取り組もうと駆け抜けることができました。硬式テニス部での活動では、学内にとどまらず多くの仲間と出会うきっかけとなりました。テニスを通じて互いを高め合える存在ができたからこそ、今の私があるのだと思います。このような学生生活を過ごせた私はとても幸せ者です。コロナウイルスが終息して、みんなでまたテニスができる日を楽しみにしています。先輩・同期・後輩そして部活を支えてくださいましたOBOGの方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。

最後になりますが、この6年間色々な場面で多くの人の支えがあったからこそ、無事に卒業できたのだと思います。学生時代に培った人との繋がりは一生ものであり、これからも先輩・同期・後輩の繋がりを大切にし、歯科医療に関わる同志として切磋琢磨していきたいです。この6年間を糧にこれから「真の強さ」を持った歯科医師として、本当の意味で患者さんのためになれるよう努めていきます。6年間ありがとうございました。



歯学部男子硬式テニス部員
2018年8月撮影

卒業を迎えて

歯学科6年 南山春菜

地元を離れ初めて新潟に来た日から、早いもので6年が経ちました。1年生の時に初めて早期臨床実習で6年生の先輩に担当してもらったとき、私はまだ歯科の専門用語も分からず、6年生ってすごいなあ、私もあんな先輩になれるかなあと感動したのを覚えています。あれから随分と月日が流れ、あの時憧れていた6年生になり、今年私たちは卒業を迎えようとしています。

まずは、これまで関わっていただいたすべての方々に感謝します。お父さん、お母さん、6年間本当にありがとうございました。今思い返せばこれまで苦労や心配をかけてしまったことの方が多い気がします。感謝の気持ちを直接伝える機会がなかなかないので少し恥ずかしいですが、受験の時から卒業するまでずっと影で支えてくれたおかげで私は最後まで挫折せずにやってこれたのだと思います。ありがとうございました。

そして、大学の先生方、大変お世話になりました。6年生になり、無我夢中の毎日でしたが、不慣れな私たちに対して日々熱心に指導してください本当に感謝しております。診療時間外でもご多忙の中私たちに多くのことを教えていただき、ありがとうございました。先生方が患者さんと接している姿を間近でみて、治療の方法だけでなく医療従事者としての姿勢を学ぶことが出来ました。いつか先生方のようになれるよう、私たちもこれから精一杯がんばります。

今年はコロナウイルスが全国で蔓延し、臨床実習も途中で中止期間がありました。次々と変化する毎日に不安を覚え、学生である私たちも一医療従事者として、今までになかった対応をしなければなりません。マスクをしないと外に出る

ことができない世の中になり、毎日増加する感染者数に怯えながら生活する日々がいつまで続くのかは分かりませんが、医療従事者である限り、こういった突然の変化に対応する力というのはきっとこれからも求められるのだらうと思います。

6年間、振り返れば楽しいことや嬉しいことより辛いことや大変だったこと、我慢しなければいけなかったことのほうが多かったような気がします。それでも、そんな辛かったこともすべて含めて私にとってはとっても楽しく大切な6年間でした。できた喜びとできない悔しさを忘れず笑顔をつくることのできる歯科医師になりたいと思います。

最後に、同期の37名のみんな、6年間ありがとうございました。51期でよかった。とても楽しかったです。同じ目標に向かって何年も一緒に戦ってきた仲間です。辛いことも悲しいこともみんながいたから笑って乗り越えられたし、すべて素敵な思い出になりました。20代の大切な時間に一緒にいてくれてありがとう。これから別々の場所に行くけれど、いつかまた歳をとって、あの時こんなことがあったよねと笑える日が来るのを楽しみにしています。それまでお互いがんばらうね。



技工室にて
写真撮影時のみマスクを外しました

卒業にあたり

口腔生命福祉学科 4年 林 唯 香

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科に入学してから早くも4年がたち、今卒業を迎えようとしています。この4年間口腔生命福祉学科で過ごす中で、歯科衛生士及び社会福祉士の知識や技術について学び、大学生活の中で大切な思い出もたくさん作ることができました。大学生活を振り返り、特に印象深い臨床実習と部活動について述べていきます。

まずは3年後期～4年生の臨床実習についてです。実習においては、実際の診療を通じた技術や知識を得ることももちろん、患者さんや他職種の方とのコミュニケーション能力を育むことができました。

実習開始時は自分の未熟さにもどかしさを感じることもありましたが、しかし、診療の補助の回数を重ね、先生方や歯科衛生士の方々からアドバイスをいただくことで、次第に自信をもって補助を行えるようになりました。

患者さんに直接スケーリングなどの処置を行った後に、「ありがとう、おかげでスッキリした！」と笑顔で伝えられた時には、達成感で胸がいっぱいになり、もっと技術を磨こうと向上心が沸き上がりました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、通常より短い期間ではありましたが、非常に有意義な実習でした。

次に私が所属していた弓道部についてです。初心者からのスタートでしたが、部員のサポートも

あり、楽しく充実した時間を過ごすことができました。部活動以外でも部飯や飲み会をしたり、大会後にはその土地の観光をしたりと楽しい思い出がいっぱいです。ここでできた繋がりを卒後も大切にしていけたらいいなと思います。

思うようにいかず、凹むこともありましたが、先輩や同級生、後輩の皆に支えてもらい、部活動を続けることができました。辛かった出来事も楽しかった出来事も、私が人として成長するために必要な経験だったのではないかと思います。

最後になりますが、これから社会人として働くにあたり、これまで以上の責任と覚悟を持ち、何事にも真摯に向き合っていきたいと思います。そして、先輩や同級生、後輩の皆、臨床実習で指導していただいた先生方、衛生士の方々、実習で関わった患者様、両親など多くの方に支えられて卒業を迎えることができました。心より感謝いたします。ありがとうございました。



2019年度三大戦

口腔生命福祉学科での4年間を通して

口腔生命福祉学科4年 岡田 真里奈

口腔生命福祉学科に入学してからあっという間に4年が経ち、卒業を迎えようとしています。特に最終学年のこの1年はとても目まぐるしい1年でした。病院での臨床実習、福祉実習、特論、講義、さらには就職活動とハードなカリキュラムを送ってきました。そしてこれらが終わった今は歯科衛生士と社会福祉士の国家試験に向けての受験勉強中の日々です。

学生生活で印象に残っていることといえば、やはり病院での臨床実習です。今年は新型コロナウイルスの関係で臨床実習に参加できない期間もありましたが、実際に臨床現場に出て、自分の未熟さを思い知りました。思うような動きができずに悩むこともありましたが、できなかったことができるようになった時や患者さんから感謝の言葉を頂いた時の達成感は大きく、やりがいを感じることができました。患者さん相手に診療補助や保健指導、PMTCをやらせていただけたことは大変よい経験になりました。また、実習について不安なことがあればお互いをフォローしあうことができた同期の存在はとても大きく、そのおかげで乗り越えられたと思っています。

課外活動の面では、全学のソフトテニスサークルに所属していました。そこでは様々な学部同期、先輩、後輩と出会うことができ、テニスはもちろん、お酒を飲みに行ったり、冬にはスノーボードをしたりと大学生らしい思い出をたくさん作ることが出来ました。この4年間を通して多くの人と関わる事で様々な価値観を知ることができたと感じています。非常に価値ある経験が出来ました。

新潟大学で過ごしたこの4年間は私のかげがえのない財産です。この4年の大学生活はどの思い

出も昨日のこのように思い出せるほど濃い日々でした。このように楽しく充実した日々を送ることができたのは、大学関係者の方々、自分と関わってくれた先輩や後輩また同期のみんな、そして1番は多くの時間を過ごした口腔生命14期のクラスメイトのおかげだと思っています。みなさんにはここには書ききれないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

私は春から地元石川県の大学病院で歯科衛生士として働きます。これからも勉強を止めることなく日々努力し、ここでの経験を糧に成長していきたいと思います。歯科衛生士として働くことが患者さんや地域の人々にとっての健康の寄与になることを願っています。



口腔生命福祉学科14期生との集合写真
写真撮影時のみマスクを外しました



ソフトテニスサークル「ダイクマ」での集合写真
写真撮影時のみマスクを外しました

大学院修了にあたり

大学院修了にあたり

顎顔面口腔外科分野 山田 茜

この度、「大学院修了にあたり」とのテーマで寄稿依頼をいただきましたので、簡単ではありますが大学院生活を振り返りたいと思います。私は新潟大学歯学部を卒業後、地元である名古屋大学医学部附属病院の歯科口腔外科で研修をしたのちに、新潟大学の大学院へ進学する道を決めました。

大学院1年目は口腔外科外来・病棟と歯科麻酔科で臨床を学びました。Hotz床の作製や全身麻酔手術のアシスタントを通して、学生の頃より興味を持っていた唇顎口蓋裂の治療を学ぶことができ非常に有意義な1年間となりました。

いよいよ大学院2年目からは口腔解剖学分野で研究が始まりました。私の研究テーマは「歯におけるNF- κ Bの役割」についてでした。具体的には、NF- κ Bを過剰発現した外胚葉異形成症モデルマウスを用いてエナメル質形成異常を引き起こす要因について解析を行うというものです。発生学の教室で、学生時代では苦手な分野で学部卒業をしたら二度と関わることのない学問だと思っていたので、基本を理解するまでとても苦労しました。

研究室では切片作りに始まり、HE染色、免疫染色、、、先生方の手厚い指導によりできる手技が増えてくるにつれて、研究テーマに対する理解も自然と深まっていくのを実感し、どんどん研究が楽しくなっていました。また、海外での学会発表の機会もいただき、著名な研究者とのディス

カッションなど、貴重な経験をすることができました。他にも、海外の街並みや食文化に触れたり、楽しいことだらけでした。研究は大変だというイメージがあると思いますが、やはり何か新しい発見をした時には大変さには代えがたい何かがあるなと感じました。研究を仕事としてしている先生方の気持ちが少しわかった気がします。

大学卒業までの6年間、研修医で1年間、さらに4年を費やし大学院へ進学することには正直ためらいもありました。また、コロナの影響もあり研究が思うように進まなかったり、4年生の集大成を発表する機会がなくなってしまったことはとても残念でしたが、それでも大学院の4年を振り返ってみると、多くのことを学ぶ機会をいただけとても充実した日々だったと思います。本当にあっという間の4年間でした。所属科である顎顔面口腔外科の先生方、研究で大変お世話になりました口腔解剖学分野の先生方、とても感謝しております。ありがとうございました！！



2018年口腔解剖学分野忘年会

大学院修了にあたり

歯周診断・再建学分野 金子千尋

私の出身地は東京都で、出身校は東京歯科大学です。以上のように新潟大学で自己紹介をすると、「なんで新潟に来たの?」とほぼ全ての方から聞かれたように記憶しておりますが、この4年間を振り返ると、やはり新潟大学歯周診断・再建学分野の大学院に進学して良かったといえます。その大きな理由は、私が頂いた研究テーマにあります。

私の研究テーマは、ざっくり言えば「歯周炎と関節リウマチとの関連」についてです。1997年にOffenbacher先生らがPeriodontal Medicine（歯周医学）を提唱され、歯周炎と全身疾患の間には関連があるという事実は、教科書にも記載されております。しかし、「実際の臨床ではどのようなことに注意すべきか」や、「歯周炎と全身疾患はどの程度関与しているのか」など、私自身の知識が足りないことが多くありました。そんななか、指導医である小林哲夫先生や、新潟県立リウマチセンターの先生方のお力を借りながら研究を進めていく過程で、歯周治療を行うと関節リウマチの疾患活動度が低下するなどの興味深い事実を知ることができ、口腔と全身が深く関係することを目の当たりにしました。また、日本リウマチ学会学術集会に参加する機会を得ることもでき、私が想像していた以上に、医科の先生方が歯科疾患を重要視されていたことを知りました。驚いたのですが、リウマチ専門医の先生方の間では、歯

周炎が関節リウマチのリスクファクターであるという認識はすでに一般的です。このように医科歯科連携に関する知識を深めることができたのは、大学院に進学し、多くの先生方のお話を聞くことができたからだと感じております。

これからは、さらに高齢化が進み、全身的既往歴を有する患者さんが増加します。そんな時代の中、大学院で学んだ知識を活用し、患者さんの全身状態に留意できる歯科医師を目指していきたいと思っております。

最後になりますが、ご指導をいただきました小林哲夫先生をはじめ歯周診断・再建学分野の先生方、ならびに研究に協力してくださった新潟県立リウマチセンターの先生方に、この場を借りまして心より御礼申し上げます。そして、同期の仲間たち、みんながいるから頑張れたことが沢山ありました。4年間ありがとうございました。



歯周診断・再建学分野の同期と（筆者：右列手前）
2017年12月撮影

大学院修了にあたり

生体歯科補綴学分野 竹内陽香

新潟大学を卒業後、歯科総合診療部での臨床研修を経て、生体歯科補綴学分野の大学院に入学しました。気付けば新潟大学に来て11年が経とうとしています。こうして数えてみるととても長いようですが、特に大学院の4年間はあっという間に終わってしまったような気がします。

大学院で私は「チタン表面に接着するタンパク質の探索」というテーマで研究を行ってきました。デンタルインプラントの需要は増加していますが、オッセオインテグレーション成立のメカニズムは解明されていません。私の研究は、特にインプラントの埋入直後にインプラント体表面で起こる現象は何かに着目して行われました。研究は私にとって未知の世界で、初めは何をするにも手探りでどうしていいのか分からず悩むこともありましたが、それでも4年間研究を続けられたのは、指導医を始めとする沢山の先生方にご助力いただいたお陰です。私の研究を進めるにあたり、生化学分野の照沼美穂教授や早稲田大学の水野潤教授など当分野以外の先生方からも沢山の先生方からお力添えをいただきました。

当分野は臨床にも力を入れており、定期的に行

われる症例検討会では様々な意見をいただくことができました。自分では最善だと思っていた治療法でも他により良い方法があることに気付かされ、その予後も含め患者さんにとっての最善を考えることを学ぶことができました。大学という場所は多くの先生方がおり、様々な意見を聞くことのできる貴重な場です。経験を積んだ先生方から自分の治療について意見をいただけたことは、まだまだ未熟ではありますが一人の歯科医師としての成長につながったと思います。

私がまだ学生だった頃にとあるOBの先生から大学院は「考えること」を学ぶことのできる場所だ、と言われたことがあります。大学院生活を振り返ってみて、本当にその通りだと思います。研究で未知のことに対し自分なりに考えてみることで、臨床で一人一人の患者さんに向きあい患者さんにとってより良い治療はないかを考えること、そういった考えることに時間を使えるのは大学院に残ったからこそできたことだと思います。4年間その環境の中で考えたこと、学んだことは今後の自分にとって大きな財産となるでしょう。

最後にこの場を借りて、4年間ご指導いただいた魚島勝美教授、秋葉陽介先生を始め、生体歯科補綴学分野の先生方、そして共同研究者の皆様に心より御礼申し上げます。

大学院修了にあたり

口腔生命福祉学専攻博士前期課程

増澤美有

「2年間なんてあっという間だよ」。2年前に大学院進学についてご相談させていただいた先生の言葉通りでした。

大学院に進学することを視野に入れたのは、学部生4年の秋頃でした。それまでは進学については全く考えていませんでしたが、卒業が近づくにつれて学び舎を離れることに不安を感じたことが進学を決めた一番の理由だったと思います。この道を選んでよかったと心から思います。

漠然とした理由で進学を決めたため、研究テーマはすぐには決まりませんでした。また、興味のある研究テーマで計画を立てても、現実的な方法をみつけることが難しく、悩むこともありました。そして、先生方との相談を重ねて、研究テーマを決めることができました。研究を一から学ぶ私にとっては、研究に使用させていただいた既存データが非常に貴重であることに気が付くまでには少し時間がかかりましたが、恵まれた環境で研究をさせていただきました。

研究は、「歯の喪失要因」をテーマとしました。歯の喪失は多くの要因が考えられる疾患ですが、その中でも今回は、高齢者に着目して口腔保健に

関する信念や口腔保健行動による影響を調査することにしました。Health Belief Model (HBM)に基づいて、対象者の口腔保健に関する信念を評価し、口腔保健行動との関連を分析しました。また、これらが歯の喪失に及ぼす影響についても分析をしました。結果は、口腔保健に関する信念や口腔保健行動が望ましい状態である者ほど、現在歯数がより多いことを示唆するものでした。

実際に研究をしてみると、分析に取り掛かるまでにも、対象者や方法の決定などいくつかの段階において、初心者の方にとってはスムーズに進むことはありませんでした。限られた時間の中での研究は、様々な制限もありましたが、大学院での経験を通して、進学前と比べて確実に物事の捉え方が変わったと思います。

大学院進学前には、進学をしたいが臨床経験も積みたいという想いに悩むこともありましたが、それを両立することのできる環境を整えていただいていることが、本大学院専攻の大きな特徴であると思います。大学院進学を考えている方には、ぜひ進学をおすすめします。大学院での研究を通して学んだことは、必ず役に立つと思うからです。

研究を進めるにあたり、ご指導をいただいた先生方に改めて御礼を申し上げます。大学院の経験を活かし、今後も精進して参りたいと思います。

令和2年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	渡辺 真光 （口腔生命科学）	Number of Remaining Teeth as a Predictor of Prospective Falls in Community-dwelling Japanese late Elderly: 1-year-cohort study （日本人地域在住後期高齢者における将来的な転倒の予測因子としての現在歯数）
博士（歯学）	永田 量子 （口腔生命科学）	Current prevalence of oral Helicobacter pylori among Japanese adults determined using a nested polymerase chain reaction assay （Nested PCRアッセイ法による日本人の口腔Helicobacter pylori の検出率）
博士（歯学）	笹川 祐輝 （口腔生命科学）	Lip-closing pressure during food intake from a spoon in normal children （健常な小児のスプーンを用いた摂食における捕食時口唇圧について）
博士（歯学）	野上 有紀子 （口腔生命科学）	Prevalence of an incompetent lip seal during growth periods throughout Japan: A large-scale, survey-based, cross-sectional study （日本における小児期の口唇閉鎖不全の有病率：大規模調査に基づく横断的研究）
博士（歯学）	竹内 陽香 （口腔生命科学）	Investigation of titanium-adhesive proteins using a nano-smooth titanium substrate （超平滑チタン基板を用いたチタン接着タンパク質の探索）
博士（歯学）	浜谷 桂佑 （口腔生命科学）	ラット垂直歯根破折修復モデルを用いた歯科生体材料に対する歯根膜組織反応の組織学的検索
博士（歯学）	山田 茜 （口腔生命科学）	Overactivation of the NF- κ B pathway impairs molar enamel formation （NF- κ B経路の過剰が臼歯エナメル質形成に異常をもたらす）
博士（歯学）	結城 龍太郎 （口腔生命科学）	Hotz床併用二段階口蓋形成手術法により管理した片側性唇顎口蓋裂患児の5-Year-Olds' Indexによる咬合評価
博士（歯学）	金子 千尋 （口腔生命科学）	Circulating levels of carbamylated protein and neutrophil extracellular traps are associated with periodontitis severity in patients with rheumatoid arthritis: A pilot case-control study （関節リウマチ患者における歯周炎重症度とカルバミル化タンパクおよび好中球細胞外トラップの血清レベルの関連：パイロットケースコントロール研究）
博士（歯学）	高見澤 圭 （口腔生命科学）	Association between serum IgG antibody titers against Porphyromonas gingivalis and liver enzyme levels: A cross-sectional study in Sado Island （血清抗 Porphyromonas gingivalis IgG 抗体価と血清肝機能マーカー値との関連性：新潟県佐渡市における横断研究）
博士（歯学）	田村 光 （口腔生命科学）	Peptides from rice endosperm protein restrain periodontal bone loss in mouse model of periodontitis （コメ胚乳タンパク質由来ペプチドは、歯周炎モデルマウスにおける歯槽骨吸収を抑制する）
博士（歯学）	都野 隆博 （口腔生命科学）	Ingestion of Porphyromonas gingivalis exacerbates colitis via intestinal epithelial barrier disruption in mice. （嚥下された歯周病原細菌Porphyromonas gingivalisは腸管上皮バリア機能の破綻を介して腸炎を増悪させる）
博士（歯学）	日吉 巧 （口腔生命科学）	Aggregatibacter actinomycetemcomitans induces detachment and death of human gingival epithelial cells and fibroblasts via elastase release following leukotoxin-dependent neutrophil lysis （Aggregatibacter actinomycetemcomitansはロイコトキシンにより好中球を溶解し、エラスターゼを漏出させることで、ヒト歯肉上皮細胞とヒト歯肉線維芽細胞に細胞剥離および細胞死を誘導する）

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	干川 絵美 （口腔生命科学）	Noninvasive measurement of cell/colony motion using image analysis methods to evaluate the proliferative capacity of oral keratinocytes as a tool for quality control in regenerative medicine （口腔ケラチノサイトの増殖能を評価するための画像解析法を用いた細胞／コロニー運動の非侵襲的測定 —再生医療用細胞品質管理ツールとして—）
博士（歯学）	松岸 葵 （口腔生命科学）	Rice peptide with amino acid substitution inhibits biofilm formation by Porphyromonas gingivalis and Fusobacterium nucleatum （コメ由来ペプチドのアミノ酸置換体はPorphyromonas gingivalis と Fusobacterium nucleatumのバイオフィルム形成を阻害する。）
博士（歯学）	目黒 史也 （口腔生命科学）	Reptin regulates organogenesis via the DNA damage response in embryonic epithelium. （Reptinは胎仔上皮におけるDNA損傷応答を介して器官形成を制御する）
博士（歯学）	山崎 恭子 （口腔生命科学）	Changes in gut microbiota induced by ingested oral pathobiont deteriorate the pathology of non-alcoholic fatty liver disease in mice. （口腔由来の病原細菌による腸内細菌叢の変化はマウスにおいて非アルコール性脂肪性肝疾患の病態を悪化させる）
博士（歯学）	工藤 武久 （口腔生命科学）	Ift88 regulates enamel formation via controlling Shh signaling （Ift88はShhのシグナル制御を介してエナメル形成を調節する）
博士（歯学）	長崎 司 （口腔生命科学）	Investigation of tongue pressure and orofacial muscles' activities during swallowing in patients with mandibular prognathism （骨格性下顎前突症患者における嚥下時舌圧発現様相および顎顔面筋群筋活動の検討）
博士（歯学）	LAY THANT （口腔生命科学）	How does the ROCK inhibitor enhance osteoblastic differentiation? （ROCK阻害剤はどのように骨芽細胞分化を促進するか？）
博士（歯学）	羽尾 直仁 （口腔生命科学）	Coordination of respiration, swallowing and chewing in healthy young adults （健常若年者における呼吸、嚥下、咀嚼の協調）
博士（歯学）	吉村 将悟 （口腔生命科学）	Masticatory behavior and masticatory performance are independently associated with BMI （咀嚼行動と咀嚼能率は独立してBMIと関連する）
博士（歯学）	遠藤 諭 （口腔生命科学）	Examination of factors affecting condylar bone changes following surgical-orthodontic treatment （外科的矯正治療に伴う下顎頭骨変化に影響を及ぼす因子の研究）
博士（歯学）	羽賀 健太 （口腔生命科学）	Cancer-associated fibroblasts promote the migration and invasion of oral squamous cell carcinoma cells via the TGF- β /SOX9 axis （がん関連線維芽細胞はTGF- β /SOX9経路を介して口腔扁平上皮癌細胞の遊走および浸潤を促進する）
博士（歯学）	高村 真貴 （口腔生命科学）	A comparative study between CT, MRI, and intraoral US for the evaluation of the depth of invasion in early stage (T1/T2) tongue squamous cell carcinoma. （早期舌扁平上皮癌の術前DOI計測におけるCT、MRI、口腔内USの比較）

令和2年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

博士の専攻

分野の名称 氏名（専攻） 博士論文名

修士 倉又七海 フッ化ジアンミン銀の歯根象牙質脱灰抑制効果の検討
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学)

修士 齋藤菜月 地域在住高齢者における口腔内の自覚症状と運動機能の関連
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学)

修士 古田彩佳 障害者福祉施設の通所者を対象とした口腔保健状況と実行機能の実態調査
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学)

修士 増澤美有 70歳地域在住高齢者の口腔保健に関する信念および行動が歯の喪失に及ぼす影響
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学)

博士 森下志穂 Relationship between mortality and oral function of older people requiring
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学) long-term care in specific rural area of Japan: A 4-year prospective cohort
study
(中山間地域における要介護高齢者の生命予後と口腔機能との関連：4年間の前向き
コホート研究)



臨床研修修了にあたり

研修プログラムを修了して

Aコース臨床研修歯科医 小林 由奈

研修医としての1年が早くも終わろうとしており、本当にあっという間だったなと感じております。今年はAコースでの研修医の人数が少なく必然的にバタバタすることもありましたが、先生方や同期に恵まれ毎日楽しく研修医生活を送ることができました。新型コロナウイルスの関係もあり、研修初日から外来へ出ることができなかつたり、診療制限があつたりとイレギュラーなこともありましたが、先生方のご指導のもと研修医として学ぶべきことを学べたのではないかと感じております。

この1年間は非常に充実しておりましたが、担当医としての責任を感じながらもうまくいかないことばかりで、時間がかかってしまつたり、判断ができなかつたりと悩むことが多々ありました。予定外の診療となることもありましたが、そのたびに先生方に指導していただき、乗り切ることができました。自分自身はどう考えているのか、今日はどのような診療をすべきか、今後の治療計画はどうなのか、先生方はどれほど忙しい時でも私たちの考えをしっかりと聞いてくださり、自分自身で考え積極的に取り組む姿勢が身につきました。新潟大学Aコースでの研修は、1人の患者さんを診させていただく時間が十分にあり、1年間見続けることができる恵まれた環境にあります。多くのことを吸収できるはじめての1年をこの研修施設で過ごすことができ、歯科医師として良いスタートをきれたのではないかと感じております。指導医の先生をはじめ、いつでも親身に相談に乗ってくださり質問しやすい環境が整っているため、わからないことは放置せずに納得したうえで

診療に取り組むことができました。診療がない時間は先生方のアシストをさせていただき、治療方法や材料の選択はもちろん、患者さんへの説明の仕方を学ばせていただきました。実際に間近で見えておくことで自分の診療時に活かすことができ、先生方から貴重なアドバイスもいただけたため、アシストは有意義な時間となっていました。

Aコースでの研修は基本的にペアでの診療となっておりますが、お互いアドバイスしあつたり、診療準備を行つたりと、研修医として歯科治療を行ううえで私にとって欠かせない存在でした。毎日診療について相談しあい、以前の診療経験や先生方のアシストに入った時の経験を話し合うことでより良い治療計画となっていたのではないかと思います。珍しい症例もお互いの経験として学べましたし、1年間研修を行う上でペアがいてくれるということは心強く頼もしかったです。

最後になりますが、ご指導して下さった先生方、いつも支えて下さった同期の皆さん、衛生士さん、看護師の方々に感謝申し上げます。研修医として学んだ経験を忘れずに、今後も歯科医師として日々精進して参ります。1年間本当にありがとうございました。



藤井教授の誕生日にて
写真撮影時のみマスクを外しました

臨床研修修了にあたり

Bコース臨床研修歯科医 高田 翔

この度、執筆を賜りました研修歯科医の高田です。四月から大阪府の西尾歯科で、十月からは歯の診療科で臨床研修をしています。

研修生活は二週間の自宅待機から始まりました。無縁の土地で、人との関わりを断った生活は(楽しかったですが)、社会に出るはずの私の思想を内向的にしました。いざ出勤すると西尾歯科の皆さんは感染対策を行いながらも忙しく働いていました。臨床風景は大学のそれとはまた異なり、歯科医師とスタッフの密接な連携と効率的な動きは活気に溢れており、渦のようでした。出勤してから二週間くらいは頭真っ白で、何も覚えていません。同い年か年下のスタッフが立派に働いていて、差を感じた記憶が唯一残っています。先生方もスタッフの方々も優しく話しかけてくれましたが、関西弁の知らない人がたくさんいて困惑していました。それでもなんだかんだで、次第に私はその渦にのまれていきました。西尾歯科では、CR修復や根管治療、義歯の調整など実際にたくさんの処置をさせていただき、わからないことや困ったことがあると上級医の先生が快くフォローしてくださりました。また、院長はわざわざ時間をとって診療手技から患者対応まで様々なことを教えてくださりました。先生方は皆向上心に溢れていて、私とは知識量も経験値もまるで違うというのに、私と一緒に学ぶかのように接してくれました。そんな環境は新鮮で心地よかったです。私生活は「沼」を啜る毎日で、許されるならもっと関西弁を浴びたかったです。しかしながら、虫もカブトムシも観ることができて、クマゼミの声を浴びることは叶いました。そして西尾歯科を去る際は、この人間関係を失うのは惜しいと思うほど

に、私は溶けていました。

十月からは歯の診療科での研修が始まりました。戻ってきて、まず感じたのは“大学ってやっぱり凄い”ということです。学生時代、私は診療の方法など一つ一つの手技の意味を考えながら学んできたつもりです。しかし、初めて学ぶことばかりで、教わったことを絶対的に信じきってしまい、それが私の中での「常識」になっていました。しかし、大学から離れ、学んできたこととは違う方法や考え方を知ることによって、以前よりフラットな気持ちで「意味」を考えられるようになりました。すると大学で行っていることはとても理に適っていて、そしてそれは充実した医療機器や材料、時間、先生方の専門性の高い知識に支えられていると感じました。歯の診療科ではマイクロスコープを使用して、根管を視覚的に把握しながら行う根管治療を経験させていただき、生じた疑問は指導医の先生がすぐに解決してくれます。そんな感じで充実した研修生活を過ごしております。皆様の支えがあって、送ることのできる日々に感謝しつつ、精一杯自己研鑽していく所存です。残る期間も楽しく使い尽くして、臨床研修修了します。ありがとうございます。



西尾歯科にて記念撮影
写真撮影時のみマスクを外しました

歯学部長等の選考について

前田健康歯学部長の任期満了に伴い、歯学部教授会から推薦のあった2名の歯学部長候補適任者の中から、学長は前田健康教授を選考しました（任期は2021年4月1日から2023年3月31日まで、歯学科長兼務）。また前田歯学部長は、歯学部副学部長として、小野和宏教授（学務担当、評議

員）、多部田康一教授（総務・施設・渉外担当）、井上誠教授（研究担当）、照沼美穂教授（国際交流担当）、学部長補佐として、大内章嗣教授（医歯学系副学系長）、寺尾豊教授（広報担当）、口腔生命福祉学科長として葎原明弘教授を任命しました。

教授人事について

大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻口腔保健学分野山崎和久教授の後任として、濃野要

先生（新潟大学医歯学総合病院講師）が選考されました。発令は2021年4月1日付け。

歯学部の研究力調査結果について

学術出版社の一つであるElsevier社は世界最大級の抄録・引用文献データベースであるScopusを運営し、このScopusを用いて各教育研究機関、研究者の研究業績を分析、視覚化することができます。またこのScopusを用いて、世界大学ランキング（THE World University Rankings, QS World University Ranking）、国立大学法人評価（第2期中期目標期間の評価、第3期中期目標期間4年目終了時の評価〔大学改革支援・学位授与機構〕など）、科学技術政策立案に利用されています。この度、新潟大学歯学部では、①歯学部教員の研究力の現状の可視化、②歯学部の研究の強みの可視化、③分析結果を今後の部局の戦略策定の際の参考とすることを目的として、Elsevier社に分析を委託して、全教員の研

究業績実績調査を行いました。

その結果、2015～2019年のScopus掲載論文数は658本（年100～150本程度）、2015～2019年のFWCI（Field Weighted Citation Index：被引用インパクト）はほぼ世界水準（世界平均を1.0と定義）、トップ論文比率、トップジャーナル論文比率、国際共著論文比率は、いずれも世界平均と同等以上の水準で推移、分野別ではDentistry, Medicine, Biochemistry, Genetics and Molecular Biologyの論文が多く、Dentistry分野においてはFWCI、トップ論文比率が特に高いことが明らかになりました。

また、論文数10位までのトピッククラスターのうち、6件（Oral Health, Periodontitis, Dental Caries [TC.125], Tooth, Bone And

Bones, Dentin [TC.14], Orthodontics, Malocclusion, Temporomandibular Joint [TC.236], Deglutition Disorders, Stroke, Patients [TC.1207], Pneumonia, Streptococcus Pneumoniae, Anti-Bacterial Agents [TC.159]) が国内10位以内に入っていました。特に、

TC.1207は国内1位、TC.1207, TC.125, TC.236は世界トップ100位以内に位置していました。

本結果については、2020年12月16日に歯学部FD講演会で全教員に報告されました (<https://www.dent.niigata-u.ac.jp/news/5788/>)

令和2年度科学研究費採択状況について

文部科学省は科学研究費助成事業の中区分別採択件数上位10機関、いわゆるトップテンランキングを公表しています。昨年度は全国6位でしたが、2年間累積新規採択件数85件となり、今年度は5位となりました。累積新規採択率は45.0%で、これは全国2位の採択率でした（1位は大阪

大学で48.4%）。

歯学系の1研究者あたりの新規+継続課題数は0.72、基盤B以上の課題数は0.12（過去4年間の平均は、それぞれ0.74, 0.17）、医歯学総合病院（歯系）では、それぞれ0.57, 0（過去4年間の平均は、それぞれ0.57, 0）となっています。

新潟大学優秀論文表彰の受賞について

今年度から、新潟大学が研究成果の国際発信力を高め、研究意欲向上を図ることを目的として国際的に評価の高い学術誌に論文を掲載した研究者を顕彰する表彰制度が開始されました。今年度の受賞者として、歯学部からは、摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授、小児歯科学分野の齊藤一誠准教授、う蝕学分野の竹中准教授が選ばれました。受賞論文は以下の通りです。

井上 誠教授：Effect of attention on chewing and swallowing behaviors in healthy humans. Sci Rep.9 (1) : 6013, 2019 doi: 10.1038/s41598-019-42422-4.

齊藤 一誠准教授：Repeated human

deciduous tooth-derived dental pulp cell reprogramming factor transfection yields multipotent intermediate cells with enhanced iPS cell formation capability. Sci Rep.9 (1) : 1490, 2019. doi: 10.1038/s41598-018-37291-2.

竹中 彰治准教授：A horizontal sequential cutting method to estimate the effectiveness of dentin disinfection by using confocal laser scanning microscopy. J Endod 45 (9) : 1142-1147, 2019. doi: 10.1016/j.joen.2019.06.004

E棟 4階アライアンスラボの整備について

歯学部共同基礎研究室ならびに共通機器室であるE4アライアンスの全面改装を行いました。これまでの利用状況やニーズを踏まえ、細胞培養室の他に新たに感染実験用の細胞培養室を新設・整備しました。また、大型機器を1箇所に集約化させ、分野の垣根を超えた研究を推進するためのベンチスペースと分けることにしました。E4アライアンスラボの使用はフリーアクセスを基本としています。利用にあたっては、ベンチフィーの徴収、利用許可を必要とします。

(口腔生化学分野 照沼美穂)



入り口から見たE4アライアンスの様子

オールインワン蛍光顕微鏡の設置について

E4アライアンスラボにキーエンス社のオールインワン蛍光顕微鏡BZ-X800を設置しました。この顕微鏡は一般的な蛍光顕微鏡としての機能を有するだけでなく、プレートに培養した細胞の観察やライブイメージングを自動で行うことができます。また画像の定量解析機能も有しており、セルカウントや三次元形状・局在解析など、さまざまな角度からの画像解析を行うこともできます。このような多機能性を有する本機器は、歯学部内での共用化を図るためにE4アライアンスに設置されました。今後、学問分野の垣根を越えた学内外、共同研究を推進するために活用されることが期待されます。本機器の使用にあたっては、口腔

生化学の照沼までご連絡ください。

(口腔生化学分野 照沼美穂)



設置されたBZ-X800一式

セレプレックスダイレクト32およびセレスティムM96 (BlackRock社製) の導入について

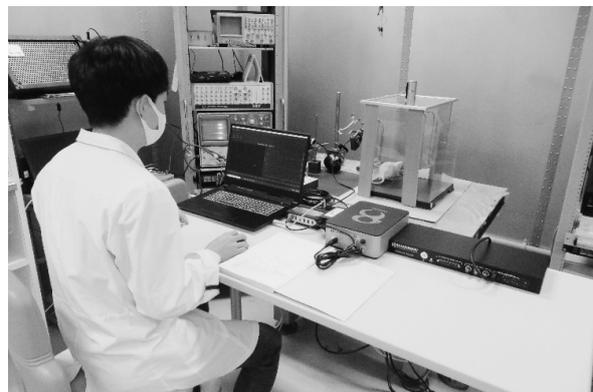
この度、C棟6階のコモンラボに、セレプレックスダイレクト32およびセレスティムM96 (BlackRock社製) を導入しました。

脳と末梢の各臓器は互いに密接に連絡をしており、多くの行動は中枢と末梢の双方向の情報伝達を経た結果ととらえられているので、中枢での神経活動に伴う情報処理を定量化するためには、多チャンネルで同時神経記録が望まれます。この度導入したシステムは、多くの神経の電位記録により、動物の行動と相関する神経活動の周波数解析や数十個の神経細胞ひとつひとつの活動電位の時間的変化を抽出することが可能です (マルチチャンネルレコーディング)。一方、すべての神経は中枢や末梢で回路を形成しており、多くの受容体やこれを活性化する伝達物質が関与します。これらの神経を特異的に活性化するために、遺伝子導入によって光応答性タンパクをある特定の細胞に発現させ、これを光刺激することによって細胞を興奮させることが同システムにより可能となりました (オプトジェネティクス)。特定運動に関わる神経活動をマクロ・ミクロの両視点から明らかにできるというのが本システムの強みです。

摂食嚥下運動は、単に「嘔む・飲む」という動

作で完結するものではなく、空腹感などの内因性環境や食品認知に関わる脳の機能が正常に働くことが必須であるという点では、広く哺乳類に共通な統合運動といえます。今回導入されたシステムは、覚醒自由行動下の動物に使用できること、高い時間・空間分解能をもって細胞レベルの解析ができること、可逆的・即時的・生体直交的に細胞機能を操作/制御できることなどの利点を持っているので、今後さまざまな共同研究の足場とすることが可能であり、トランスレーショナルな研究を推進することが期待できます。

(摂食嚥下リハビリテーション学分野 井上 誠)



導入されたマルチレコーディングシステム

文部科学省2020年度「国費留学生の優先配置を行う特別プログラム」の採択について

このたび、本学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻が応募していた『「食べる」を起点とする歯科医療リーダー養成プログラム』が文部科学省事業2020年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に採択されました (https://www.mext.go.jp/content/20201207_mxt-gakushi02_000011491_01.pdf)。この事業は国公立大学大学院が実施する国際的に魅力のある留学生受入れプログラムを文部科学省が選定

し、優先的に国費外国人留学生の配置を行うもので、本専攻は昨年度に引き続き2年連続の採択となりました。このプログラムでは優先配置期間に南米諸国における歯科医療のリーダー候補の発掘とその育成を目指します。事業期間は令和3年度から3年間で、毎年、国費留学生3名が配置されます。全国歯学部では本専攻を含め、2プログラムが採択されました。

JASSO海外留学支援制度の採択について

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が公募していた海外留学支援制度の採択結果（2021年度分）が通知されました。歯学部から応募していた2プログラム（『世界展開力涵養支援による歯科関連グローバル人材養成プログラム』[協定

派遣学生交流推進タイプB]、『国際的視野で口腔保健医療を俯瞰できる人材育成プログラム』[協定受入学生交流推進タイプB]）の計2件が採択されました。

遠隔講義システムの完全双方向化について

先号で紹介したように、令和2年度補正予算により、歯学部では、学生が複数の教室に分散してリアルタイムで講義を受講できる遠隔講義システムを導入し、2020年度後期からの講義に活用しています。しかしながら、講義送信装置をiALC1、講堂、小会議室2に設置しましたが、予算の関係上、第1～7講義室には受信装置しか設置しておらず、講義をする教員からは受信側講義室の学生の様子を見ることができず、また受信側講義室の

学生からの質問もしづらいという難点がありました。これらを解決するために、受信側講義室に画像送信および集音システムを導入し、講義の完全双方向化を行いました。このシステムの整備により、3密を回避した対面型講義が可能となり、コロナ禍でもZoom等による非対面型講義と併用することで、高い学修効果が得られると考えています。

旧歯学部附属病院中庭の整備について

旧歯学部附属病院跡地は新潟大学イノベーションハブとして整備されましたが、中庭の整備が行われていませんでした。中庭中央に池があり、またその周囲には樹木、雑草がうっそうとして景観が悪いこと、また歯学部には屋外の休憩スペースがなく、学生、教職員の憩いの場がないことから、この度、中庭の整備を行いました。池の埋め立て、樹木の伐採、雑草除去、整地後、全面に人工芝を敷き詰め、また複数のベンチを設置しました。春を迎えたら、学生、教職員に開放する予定にしています。なお、この中庭には旧F棟1階から出入りすることができます。



整備された旧歯学部附属病院中庭



歯学部学生の様子

歯学科1年 網塚 ひかり



入学からあっという間に時が経ち、今年度も残りわずかとなりました。歯学部での授業について少しと、これまでの学生生活を振り返って私が感じたことを書かせていただこうと思います。

1年生のうちには主に一般教養科目を学ぶため、歯学の専門的な勉強はあまり行いませんでしたが、今後専門的な知識を学んでいく上で必要なことを、前期の間に学びました。まず、早期臨床実習では、大学病院の各歯科診療科について、先生方からパワーポイントや動画を用いた説明があり、どんな診療が行われているのかを学びました。歯学スタディ・スキルズでは、ワードやエクセルの使い方など、今後の大学生活で必要なスキルを学びました。パソコン操作やレポートの作成など、初めての作業で難しく感じることもありましたが、試行錯誤しながら、頑張ることが出来たと思います。

私にとって今年度は、大学入学という人生の節目であったとともに、感染症対策の関係で、今までの生活様式までもが一変した年でした。そのため、入学してからしばらくは、楽しいことよりも大変なことの方が多かった気がします。一人暮らしが始まり、新しい環境に慣れるまでの苦労がありましたし、オンラインでの授業は、どう集中を継続させるかで悩みました。また、なによりも辛かったのが、同期生とのつながりがほとんどなかったことです。新潟で暮らしながらも同期生と直接関わる機会がなく、孤独で不安だったことを

覚えています。

しかし、前期の終わり頃から徐々に部活動が始まり、部活の先輩方や友人と関わるようになってからは、ようやく自分の大学生活が始まったような感覚で、毎日がとても楽しく感じるようになりました。先輩方は私たち新入生を温かく迎えてくださり、時には相談に乗ってくださったのが本当にありがたかったです。部活で出来た友人とは、不思議なくらい出会ってすぐに打ち解けることができ、悩みを相談したり、遊んだり、互いに支えあいながら、楽しい日々を送ることが出来ています。また、後期からは心の余裕も出てきて、自動車学校、アルバイトを始めるなど、より充実した生活を送ることが出来るようになりました。現在も、前向きな気持ちで日々を過ごしています。

もし、コロナウイルスが蔓延していなければ…、もっと早く友人たちと出会えていたら…などと考えてしまうことももちろんありますが、一人きりの時間が長かった前期の経験があったおかげで今、友人や先輩方など、誰かとつながる喜びを大きく感じる事が出来ているのだと思います。また、寂しい時に電話をくれた家族の声は本当に温かく、いつも支えてくれる家族への感謝の気持ちを深く感じました。

今年度は、入学式や、その他の大学のイベントなど、楽しみにしていたことが中止となってしまい、今までの様にはうまくいかないことの多い年でした。ですが、普段気づかなかったことに気づくことが出来た、大切な年だったのでないかと思います。これからの大学生活の中でさらに困難なこともあると思いますが、人とのつながりを大切に、感謝を忘れず、前向きに頑張っていきたいと思っています。

2年生の今

歯学科2年 橋本 凜之輔

2年生に進級してはや半年以上経過しました。1年生の頃に学習をしていた五十嵐キャンパスから旭町キャンパスへと移動し勉強内容も専門分野が中心となったため、心機一転し、非常に新鮮な気持ちです。しかし、今年は例年とは違い進級に伴って新型コロナウイルス感染も拡大していきました。新型コロナウイルスは日本を狂わし、同様に私たちのキャンパスライフも狂わされました。専門分野の勉強がはじまるにあたって、様々な面で不安を抱えていただけに新型コロナウイルスによってその不安はより大きなものとなりました。友人にも会えないという状況であったため、不安は増していく一方でした。講義、実習はどうなるのか、試験の実施はどのようにされるのか、様々なことを考えました。

しかし、大学そして教授の先生方は不測の事態であったにも関わらず、Zoomでの授業を行なってくださるだけでなく、講義資料の作成やそれに伴った講義動画の作成など様々な工夫を施し、迅速な対応をしてくださいました。私はこのような講義体制を体験したことがなかったため、慣れない講義に非常に戸惑ってしまいました。そんな中でも受講したそれぞれの講義には工夫が施されていたため理解がしやすかったと感じました。ただ、対面講義ではないうえに、初めての専門分野であるため、時々自分一人では理解が難しい部分も出てきました。そんな時は友人の助けが非常に大きかったと感じます。実際に会うことはできないため、SNSやZoomといったものを介すこと

でお互いに理解を深めていきました。このようなコロナ禍の中でも、滞りなく学習できているのは偏に教授の先生方と友人のおかげであると思います。現在は講義体制にも慣れてきて、学習の質はより改善され、より有意義なものとなっています。

現在の学習内容はすでに歯科医師として必要な知識に直結するような内容であるため、非常に重要です。国家試験をまだ先のことであると考えることなく、現在学んでいる内容による知識の基盤づくりを行なっていきたいです。この基盤が今後進級をしていき、新たな知識を獲得し、理解を深めていく中で生きてくると思います。そのため、日々の講義内容の復習を繰り返し、知識を定着させていきたいです。また、ただ漠然と学習をするのではなく、なぜ今この学習をしているのか、この学習は医療現場へ出た時にどのように活かされるかを考え、理解を深めていくことが大切だと思います。この先も、現在の状況を言い訳に学習を疎かにしてしまわぬよう友人と支え合い、学習に励んでいきたいと思います。今後、医療従事者となるにあたってこのような不測の事態というのは起きてしまうと思います。人の命に関わることであるため、迅速な対応が必要とされます。そのため、このような状況は大きな経験となり、また対応力も養われたと感じます。このように、知識だけではない、医療現場で必要とされる様々な力を今後の大学生活での講義や実習などで養っていきたいと思います。

歯学部学生の様子

歯学科3年 成之坊 有 香

原稿の依頼を受けた時は、3年生に進級して約8ヶ月が経った頃でした。今年度は新型コロナウイルスの影響により、例年通りのように対面授業を行うことが難しい中、先生方のおかげで滞りなく、実習を行うことが出来ました。ありがとうございました。

3年生の前期に行われた人体解剖学実習は例年よりも短期間で行われましたが、学ばなければならない知識は例年通りのため、肉体的にも精神的にも辛いと感じる時が多々ありました。しかし、同期や先生方に支えて頂きながら、充実した実習を行うことが出来たと思います。そして、前期で経験した実習への向かう姿勢や精神力を後期の実習や講義へ活かしていこうという思いを胸に後期の実習や講義に臨みました。後期での授業では2年生や3年生前期とは異なり、基礎分野から臨床に関わる実習や講義が増え、後期の初めは慣れない日々を過ごしました。私は直ぐに歯冠修復学の実習で困難に直面しました。実習ではタービンを持つことも、印象をとることも全て初めてで、事前に予習をしても失敗してしまうことも多かったです。失敗してしまうことで周りより遅れをとってしまうなどの恐怖心もあり、控えめな行動をとってしまうこともありました。しかし、失敗した際には、「なぜ失敗したのか」「どうしたら上手くいくのか」を自分で考え、また先生方に尋ねることにより、失敗から学ぶことが出来ました。このような失敗から学ぶことも多かったです。また、実習書を読んだり、動画を見てきてもイメージ出来ないことも多く、その時は実習に来

て下さる先生方に質問することにより、疑問を解決することが出来ました。講義や教科書で学んだ治療や製作の流れで理解しにくかったことも、実習を通して「なぜこの手順で行うのか」「この手順を行う意義」など新たに理解することもありました。また、実習に少しずつ慣れていく中、治療や製作を上手く行うだけではなく、実際に患者さんに行うことを意識して、力加減やレストの位置を考えられるようになってきました。実習を通して、自分たちの意識や手際など少しずつ成長できたのではないかと感じました。

3年生の後期を通して、歯科医師としての意識がさらに高まりました。臨床に関わる実習で初め壁にぶつかったこの経験を忘れずに、6年生までの残り3年間を有意義なものにしていきたいと思っています。また、心が折れそうになった時に支えてくれた同期や私たちの実習に携わってくれる先生方に感謝を忘れず、これからの3年間を過ごしていきたいです。



3年生を迎えて

歯学部生の今

歯学科4年 高橋 勇介

4年生の始まりは例年とかなり異なっていました。皆さんもご存じの通り、世界中でコロナが蔓延し緊急事態宣言が発令されていたからです。その影響により学校の開始は遅れ、オンラインでの授業が主となりました。主にZoomを利用した授業でありましたが、最初はかなり戸惑いました。ちゃんと授業に出席できているのか、課題は提出になっているのか心配な面が多かったからです。しかし、毎日それを繰り返していくうちに次第にその環境に慣れていき、今では当たり前のようにZoomで授業を受けています。授業の内容は歯科の分野がほとんどで、口腔外科学、歯周病学、予防歯科学などを学びました。以前と比べてより歯科に専門的な内容となり、いよいよ歯科医師になるという実感が強くなってきたように感じます。それに加え、それぞれの専門科医の先生が授業を行う医科学の授業もありました。医科学の授業は専門的で難しく感じましたが、臨床では医科との連携も重要であることを学びました。

夏休みまでの間、学校での実習や授業はなく、もちろん部活動も行えませんでした。例年通りであれば、4年生が部活動の主幹となり、新入生の勧誘活動を行い、毎年夏に行われる大会であるデンタルを目指しているはずでした。しかし、残念ながらデンタルも中止となってしまい、全く部活動は行えませんでした。このように、自分が思い描いていた4年生の学校生活とは遠くかけ離れていました。ほとんど家に居て、授業を受け、課題に取り組む、そんな毎日を過ごしながら夏休みを迎えました。

夏休み明けからは一変して、多くの実習が始まりました。マスクの着用、定期的な換気、毎朝の体温測定など徹底した感染対策を行いながらの実習となりました。前半に授業で学んだことを、今度は実践して学びます。授業を受けて理解したつもりでも、いざ実習でやるとなるとそう簡単にはうまくいきません。実習ではより深い理解と知識、さらに技術が必要とされます。逆に、授業ではよく分からなかったことが、実習をすることで理解できることもあります。このように座学で学び、実習で実践することが、より実践的で確実な能力に結びつくのだと感じました。実習はとて大変ですが、それぞれの実習を担当する先生方や大学院生方が丁寧に教えて下さり、なんとか乗り切ることができています。

また、共に切磋琢磨し合える同期の存在は非常に心強いと、学年を重ねるごとに感じています。これからもお互い助け合いながら歯科医師を目指せればと思います。今年はコロナの影響が続いたため、運動会や医歯学祭など様々なイベントが中止となったり、授業、実習の日程や方法が変わったりと私たち学生にとって苦難の年であったと思います。しかし、このような状況下でも、私たち学生のために様々な工夫や対策を試行錯誤してくださっている学務の職員の方々や先生方には感謝しなくてはならないと思います。無事5年生に進級することができれば、いよいよCBTやOSCE、臨床実習が始まります。今後も今ある環境に感謝しながら、日々精進していきたいと思っています。

歯学部学生の様子

歯学科5年 石垣裕理

「コロナ禍」「ステイホーム」「ソーシャルディスタンス」といった言葉が世間で聞かれるのが当たり前になりましたね。1月にCOVID-19が確認されてから、緊急事態宣言、GoToトラベルなど様々な変化がありました。当たり前だったことが当たり前ではなくなり、人々は徐々に新しい日常を受け入れるようになりました。そして2021年1月再び緊急事態宣言が発令され、2月にはワクチン接種の開始も予定されています。この先どうなっていくのかという漠然とした不安を抱えておりますが、ひとまずこのコロナ禍の中どのように過ごしてきたのか振り返ってみようと思います。

5年生は始まりから今までとは全く違う春でした。予定されていたシラバスは大幅に変更。4月に緊急事態宣言が発令され、家での自習とZoomでの講義が中心となりました。慣れない形式に戸惑ったことが多かったですし、先生方も大変なご苦労があったと思います。通常の対面形式での授業のありがたさも身にしみました。7月にCBTを控えていた私たちはこうした状況下のため例年より多く勉強時間が確保できたかとは思いますが、やはり一人で家にこもって勉強するのは精神的に参ることもありました。しかしだからこそ気分転換・ストレス発散のためにランニングと筋トレにはまったことは自分の心身の健康上良かったと思います。

6月に入って講義はZoomのまま、対面形式での実習が再開されポリクリが始まりました。シラバスの変更の影響で期間・内容が縮小し、病院内への立ち入りは禁止のために学部棟内でのみのポリクリとなったため実習の総復習をしているといったイメージで、この頃の自分はまだ実際に病院に出て診療するのだという実感も自覚も足りていなかったと感じます。CBTが無事に終わり、

おそらく自由を楽しめるのは最後だったはずの夏休みも旅行にも行けず友人にも会えずじまいでした。

9月末に無事OSCEを終え、10月中旬より臨床実習が始まりました。もうすぐ2ヶ月が経とうとしていると考えるとあっという間で恐ろしいですが、この2ヶ月は本当に濃い2ヶ月でした。まだ臨床実習を振り返られるほどの余裕もなく診療のたびに自分の未熟さを痛感させられますし、スケジュール帳にすでに数ヶ月先の予定が埋まっているなんてことは今までなかったのも不思議な気持ちです。最初の引き継ぎ期間、とても優秀で本当に親切に多くのことを教えてくださった6年生と一緒に乗り越えられたことは忘れられない時間となりました。6年生がいなくなり不安しかなかった時支えてくれた周りの同期、私達を見捨てず導いてくださる先生方、未熟な学生の診療に付き合ってください患者さん。こうした周りの人達への感謝を日々忘れずに、やるべきことから逃げずにしっかり向き合って残りの臨床実習も精進していきたいです。そしてまた気兼ねなく行きたいところに行けて、会いたい人に会える状況が戻ってくるまで気を引き締めて過ごしていきたいと思います。



お世話になった6年生との引き継ぎ
写真撮影時のみマスクを外しました

歯学部学生の様子

口腔生命福祉学科1年 川上彩菜

あっという間に入学してから半年以上が経過し、後期の講義も半分が終了しました。

前期の初めの時点では後期は五十嵐キャンパスに通い対面での講義を行うことが出来ると思っていましたが、新型コロナウイルスの収束は見られる事がなく、後期もZoomを用いた非対面での講義が続いています。入学当時は、履修登録の仕方や講義などすることすべてが初めての事で戸惑っていましたが、今ではオンラインでの講義にも慣れ、大学の友人も出来、前期よりも充実した日々を過ごしています。

一年次は教養科目の講義を受けるという事で自分の興味のある講義を中心に履修を行いました。前期には、早期臨床実習や歯学スタディ・スキルズといった歯学に関する講義が組み込まれていましたが、後期はそのような講義もなくなり歯学に関する講義を受ける機会が減ってしまいました。しかし、後期は、自分の興味のある分野についての理解を深めたり、新たな興味を発見したりする良い機会となっていると感じています。さらに、講義の中には、ただ講義を聞いているだけではなく、受講生同士で話し合いや、意見交換を行うものもあり、講義の中だけではありますが、学部、学年の異なる方たちと交流することが出来ていま

す。常に自宅で講義を受けているためこのように誰かと話すことが出来るという機会を作っていただけのことをととても嬉しく感じます。非対面授業になっても分かりやすく、楽しい講義を行ってくださっている先生方にはとても感謝しています。

また、なかなか学生同士で会う事が出来ず歯学部内でも友人を作る事が出来ないという事に対応するために春に新入生の交流会を開いてくださった事、夏休みの最後にも集まる機会を作ってくくださった事は、私たち一年生にとってとても嬉しい事でした。このような機会がなかったら、今、普段から連絡を取り合ったり、一緒にどこかに出かけたり、分からない事をお互いに聞きあったりすることのできる仲間がほとんどいない状態で一年間を過ごしていたかもしれません。このような状況になり改めて勉学を共にする仲間の大切さを学ぶ事が出来たように思います。

最後に、一年生の時期には大学に通って講義を受けること、仲間と生活を共にすることが出来ませんでした。二年生からは五十嵐キャンパスではなく、旭町キャンパスの方に移動となるため専門科目の講義が増えることとなります。来年度は仲間と共にキャンパスに通いながらの講義が出来る事を心待ちにして様々なことに挑戦したいです。

歯学部生の「当たり前」の日常

口腔生命福祉学科2年 小林花音

後期から対面授業が始まり、多くの授業を学校で受けています。しかし、コロナウイルス感染の危険性と隣合わせの状況は相変わらずで、講義は非対面形式、実習は対面形式で授業を受けている状況です。非対面で行っていたPBL形式の授業も対面できるようになり、活発に意見交換や検討ができるため、より深い学習ができています。

歯科衛生士としての技術を身につけるための実習が始まり、お互いの口で実習をする相互実習が始まりました。相互実習室に入るとすぐに手を洗い、器具を揃える時には手指消毒をします。術者になる時には帽子、ゴーグル、プラスチックエプロン、手袋をつけて患者役の口を見ています。相互実習は唾液や血液の飛沫を伴うため、手指衛生や個人防護具の装着はこのような状況下においては必要なことだと思います。しかし、臨床の現場ではこのような感染対策は「コロナだから」始めたのではなく、「コロナの前から」当たり前のことであると教わりました。歯科の現場は、コロナウイルスだけでなく、その他の感染症に感染するリスクが高く、厳重な感染対策が自分の身を守るために必要であるということを実感しました。診療中の患者さんはマスクをすることができないため、感染の危険と隣り合わせの歯科にはこの当たり前はどんな状況下でも変わらず続くべきであると思いました。現場では当たり前のこととして行われている感染対策を実習でもきちんと行い、現

場に出た時に当たり前に行えるようにしたいと思います。

学生生活の日常である学校に毎日行くということ、友人と一緒に授業を受けること、疑問に思ったことを直接先生に聞けるということ、これらはこれまで当たり前のように行っていたことです。当たり前ができなくなった今、これらのことが行えるということに喜びすら感じています。学校に行くと実習ができる。「おはよう」「今日の実習の持ち物合ってる?」「明日も実習だね」「また明日ね!」、何気ない話をして友人と笑うことができます。先生に些細なことでも質問することができます。きっとこのような状況でなければ、当たり前のことが当たり前だと考えることすらなく過ぎていたと思います。当たり前の日常が戻ってくること以上に良いことはありませんが、このような状況になり、より日々の日常を大切にしようと思うようになりました。

当たり前でできていた学生生活ができなくなった今日、私は2年生になってから「当たり前」ということについて考える機会が少なからずありました。大学生活も残り半分になろうとしている今、「当たり前」のことについて考えられたのは私にとって良い機会になりました。現場では当たり前のことが現場に出た時に当たり前に行えるように、そして友人と過ごす残りの2年ちょっとの時間がより充実したものとなるように、日々の実習や日常を大切にしていきたいと思っています。

コロナ禍における私たちの学生生活

口腔生命福祉学科3年 阿部 円 香

初めまして。口腔生命福祉学科3年の阿部円香です。

後期の授業が始まり、10月からいよいよ週2日の病院での臨床実習が始まりました。

今年は新型コロナウイルスの影響で、前期の相互実習の時間が例年より少なく、実習慣れしていない状況の中で病院に出る不安はとても大きいものでした。また、前期はオンライン授業だったこともあり、先生や先輩方から事前に病院実習のお話を聞く機会も少なく、不安が募る中でのスタートになりました。

病院実習では今までの実習とはガラッと変わり、全てのことが新しく、戸惑うこともありました。初めて見る器具や薬剤、治療内容などがたくさんあり、メモをして次の実習までに調べてきたり、ついていくのに精一杯でした。12月までの2か月間は4年生の先輩方と一緒に実習させていただく機会があり、技術的な面だけでなく、先輩方の機敏に手際よく動く姿や、患者さんとの接し方、挨拶など、たくさんのことを勉強させていただきました。分からないことだらけで不安でいっぱいなのに「分からないことある?」「こういう時は~やると良いよ。」などと気にかけて声をかけてくださり、とても心強かったです。12月からは、4年生の先輩方が実習を終えられて、今まで4年生がこなしてきたものを3年生の私たちがやる機会も多くなりました。診療の準備や印象採得の準備、指示された器具や薬剤を準備室に取りに行ったり、分からないことは先生や歯科衛生士の方々に教えていただきながら、実習に励んでいます。まだまだ勉強不足の部分も多いですが、最近では今まで出来なかったことが出来るようになったり、時に先生方に褒めていただくこともあり、自分自身の成長に喜びを感じています。

また、3年生から本格的に福祉の勉強が始まりました。毎年3年生の春頃、福祉の実習があるのですが、今年は新型コロナウイルスにより中止になってしまいました。福祉実習は2年生の前期に特別養護老人ホームに伺って以来で、福祉の現場で働く方々の実際の様子を見学できる貴重な機会だったので残念です。福祉の学習は主に、PBLや先生方の講義を通して学んでいます。社会情勢の変化で頻繁に法律が改正されたり、新たにつくられる制度に頭が混乱しますが、制度や法律を学ぶことで社会問題の歴史や、その法律がつくられた時代背景、現在の日本や世界中が抱えている問題について深く知ることができるようになり、もっと学びを深めたいと日々感じています。

2020年はコロナの影響で日常生活が制限され、不安を感じることも多かったですが、心の支えとなったのは同級生の存在です。ソーシャルディスタンスを保ちながら、昼食を食べ、今日あった実習のこと、テレビや趣味の話など、たわいもない会話をすることが毎日の楽しみになっています。そんな同級生達と過ごせるのもあと1年です。大学生活は本当にあっという間に感じます。残りの1年も仲間たちと支え合いながら、日々精進していきたいです。



実習後の1枚

バレーボール部「コロナ禍での私たち」

歯学科3年 後藤 崇

本年度は、私たちバレーボール部も活動の制限や歯科学学生総合体育大会（デンタル）の中止などを受け、部としてのあり方を問い続ける1年となりました。特に新入生に対しては、実際にバレーを経験してもらったり、お花見や会食などを通じて部活の雰囲気を知ってもらったりといった例年のような勧誘活動を行うわけにもいかず、もどかしい日々が続きました。それでも、企画したオンライン勧誘会などでは、一人暮らし・大学生活のアドバイスやレクリエーションゲームなどを通じて、不自由な中でもどうにかバレー部の魅力を伝えようと部員が奮起してくれました。また、新入生もSNSなどから巧みに情報を収集してオンライン勧誘会に何度も参加してくれて、私たちも彼らと話ができることを毎回すごく楽しみにしていました。新入生がもっとも不自由なはずなのに、勇気を出してこのような会に参加してくれるのは本当に尊敬しますし、私たちも大いに救われたと感じています。

卒業生におかれましては、デンタルが中止となったことで想像していたものとは全く異なる形での引退となってしまったでしょう。しかし、私たちが共にプレーの技術を磨き、語り合って培った絆はたとえ大学を卒業し、新潟を離れることになっても一生続くものだと思います。今回の卒業生の引退にあたって、OBOGの先輩方から沢山のメッセージをいただきましたが、どれも友情や愛に溢れたものとなっており、そういった濃い繋がりがこそ部活動の最大の魅力なのだろうと、こういった状況下でこそより強く感じます。

来年度も例年のような活動ができるかどうかはまだ分かりませんが、現時点ではデンタルが夏に開催されることが予定されています。先の見通せない中ですが、私たちは今出来ることが未来につながると信じ、日々練習を積んでいきます。最後になりましたが、是非今後とも歯学部バレー部を応援していただければ幸いです。



新入生歓迎会兼卒業生送別会

NEXUSを通じて留学生から気づかされること

歯学科4年 石 貝 聡 美

私たち新潟大学歯学部国際交流サークル、通称NEXUS（ネクサス）は新潟大学独自の短期交換留学プログラム、ショートステイ・ショートビジットプログラム（以下SSSVプログラム）の参加経験をメンバーの中心とする部活動です。2021年1月現在、60名程の大所帯で活動しております。

私たちの主な活動内容は、交換留学生との交流です。新潟大学歯学部ではSSSVプログラムの一環としてアジアを中心にアメリカ、ブラジルといった各国の歯学部から留学生を受け入れております。留学生の滞在する約2週間の間の週末や放課後を利用して留学生と晩御飯を食べに行く、温泉に日帰りの旅行に行く、歓送迎会を開くなどして留学生との親睦を深めます。多くの留学生が日本に来るのは初めてですが、最近は日本の漫画やアニメをきっかけに日本に興味をもつ学生が多く、私たちが思っている以上に日本のことに詳しく驚くばかりです。また、共に食事をしていく中で私たちが普段気にしないような文化や習慣に驚いている姿や疑問を持つ姿を見て日本固有の文化を再確認することもしばしばあります。留学生とのコミュニケーション手段は英語であります。私たちが日本人を含むアジア諸国やブラジルからの留学生と共に英語が母国語ではないので慣れないながらも必死に伝えようとしています。互いに伝えようとする姿勢、意味をくみ取ろうとする姿勢によりただ会話をするよりも関係が深くなる気がして、貴重な経験となります。

現在は、COVID-19により留学生が来日することができませんが、以前、ある留学生で英語が話せない留学生がいました。初めは私たち日本人と話すこともあまりなく、閉鎖的な雰囲気でしたが、日が経つにつれてGoogleの翻訳アプリを用

いて私たちとも会話を試みている姿に感銘を受けました。英語が母国語ではないため初めての地で日常使っていない言語で話すことのためにうらやましい気持ちはSSSVプログラムに参加したことのある私自身とても理解できます。しかしながら、その現状で留まるのではなく、話すためにと行動している姿勢はなかなか真似できることではないと思います。SSSVプログラムへの参加、日々の留学生対応を通じて感じることは日本人の英語の遅れです。同じアジア諸国の人には授業で英語も習っており、英語に触れているせいか果敢に英語で話してきます。大抵の留学生はどの学生も私たちに英語で質問や自分の意思を伝えてきます。しかしながら、日本人が海外に出た際や日本での対応をしているときに同じことができていくかと問われても首を容易に縦に振ることは難しいです。歯科医学、歯科医療という世界で生きていく上では英語は確実に必要となるスキルです。NEXUSを通じて海外の学生と積極的に会話をすることにより英語のスキルが上達すると思います。

NEXUSを通じて同じ志の海外の学生と友好関係を築くこと、自身の視野を広げること、英語のスキルの向上ができます。気軽にNEXUSを訪れてみてください。



言語の垣根を越えて楽しめる雰囲気
2019年6月撮影

コロナ禍における歯学部専門科目の授業実施

歯学部事務室学務係 櫻井拓仁

COVID-19の影響を受けて、新潟大学が第1ターム（4月～6月中旬）の授業を非対面型で行うことを決定したのは令和2年4月2日のことでした。連絡を受け取ったのち速やかに前田学部長、小野学務委員長らと協議し、授業開始を4月下旬まで先延ばしにすること、非対面型での実施が困難な授業は6月下旬以降に実施するなどの方針を固めました。

歯学部の教育の特徴の一つとして、実習や演習（PBLを含む）などを中心とした能動的学習を中心とした授業が多いことが挙げられます。特に実習に関しては、保健・医療・福祉の専門職として必要な技能を修得するために欠かせませんが、非対面型での実施は、指導ならびに設備の面から不可能です。そこで実習中心の科目を学期後半にし、講義中心の科目を学期前半に移動することとしました。講義と実習、演習が組み合わさっている授業に関しては、非対面型で実施できる内容を前倒しにしてもらうことでの対応となりました。

非対面型授業の実施形態は主にZoom等を用いたリアルタイム配信型、YouTubeなどを使用して動画配信を行うオンデマンド型、教科書や講義資料による自習をしてもらいメール等で質問を受けつける自主学習型の3つがあります。リアルタイム配信型に関しては、学生は比較的早くZoomの使い方に慣れたようですが、教員の中には慣れるまでに時間がかかった先生もいたようです。そのため、初めのうちは「授業が始まらない」「音が聞こえない」などの学生からの電話を受け、先生の研究室まで走ることがしばしばありました。

6月初めに、第2ターム（6月下旬～8月）は、実習など非対面型での実施が困難な授業については、学部長の判断により対面型で実施してよいこ

とになりました。再び学部長、学務委員長と協議し、感染対策を十分に講じて実習や演習の授業に限って対面型で行うこととしました。感染対策のため、学生には実習を行う際のマスク・フェイスシールド着用、手指消毒や室内換気の徹底をお願いし、一方で教員には感染対策に加え、気温が高くなる時期だったため室内の温度調節や適宜休憩をとるなどの熱中症対策についても依頼しました。PBLなどの演習については、非対面型で実施することが困難な部分のみ対面型での実施となりました。実習を学期後半に詰め込まざるをえず、歯学科3年次の人体解剖学実習や同5年次の総合模型実習、臨床予備実習など学生のみなさんの負担が大きかった科目もあったのではないかと思います。

学期末に行われる各科目の試験は、非対面型では学生の学習の到達度を正確に測ることが難しく、原則として対面型で実施しました。密にならないよう、複数の部屋に分けて実施し、感染対策も十分に行いました。科目によっては、例年は6月頃に中間試験を行っていた科目もありましたが、今年はそれが実施できなかったため、期末試験の範囲が膨大になってしまい、学年によっては例年以上に試験勉強が大変だったことと思います。

前期の授業が佳境に入った頃に行ったアンケートでは、学生から様々な意見を聞くことができました。非対面型の講義については、全体としてリアルタイム配信型やオンデマンド型の授業に対しては問題なかった一方で、自主学習型の授業に対しては、特に専門科目の始まった2年生から「勉強方法がわからないため難しい」という意見が多く聞かれました。実習に関しては、「対面で実施

してもらえてよかった」という意見が多くありました。他にも、「早く対面型を再開してほしい」という意見もあれば、「時間を有効に使えるため非対面型のほうがよい」という意見があるなど、非対面型の利点・欠点が色々見える内容でした。

後期については、実習や演習は対面型での実施、講義は原則非対面型での実施となりましたが、感染対策を徹底した上で、学部長の判断のもと対面型の講義をしてよいこととなり、前期と比較すると対面型授業を実施する要件が緩和されました。アンケートの結果も踏まえながら、徐々に対面型を増やし、非対面型の場合も、学生からの不満が多かった自主学習型は避けるように先生方をお願いしました。また、学部内に遠隔講義システムが導入されたことにより、学年を2つの講義室に分けて、半数を対面型、半数を非対面型としてローテーションし、密にならないように講義を

実施することも可能となりました。制限がある中でも様々な実施方法をとれるようになったため、前期に比べてスムーズに授業が行われていると感じています。

今後について、令和3年度の各授業の実施方法は現在検討中ですが、以前のような授業実施形態に完全に戻すことはまだ難しいと思います。しかし、少しずつでも元に戻っていくことができると考えています。また、対面型授業をほとんど経験していない令和2年度入学者へのフォローアップ、非対面型授業の教育効果の分析など、今後も多くの課題に取り組まなくてはなりません。

最後になりますが、コロナ禍という未曾有の状況下で、例年どおりとは言えないものの、歯学部専門科目教育を1年間実施でき、学生始め教職員みなさまに感謝いたします。



バーチャルスライドを使用した 遠隔病理学実習の取り組み

口腔病理学分野 山 崎 学

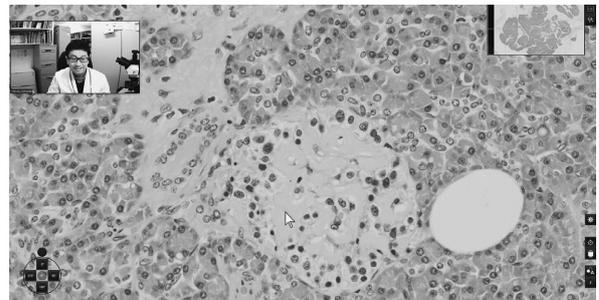
新型コロナウイルス感染症の拡大をうけて、本学では2020年の前期は原則として非対面型授業でおこなう方針が決定されました。口腔病理学分野の担当授業でも、Zoomによるオンライン授業と課題レポートを併用した非対面型授業を実施してきました。ここでは非対面型での病理学実習の取り組みを紹介させていただきます。

当分野は歯学科3年生の病理学総論、同4年生の口腔病理学を担当しています。病理学とは病気の成り立ちを分子細胞レベルで解明する学問であると同時に、診療面では病気の確定診断（病理診断）を担っており、基礎医学と臨床医学の接点となる学問領域です。病理学の基礎を学ぶために、従来は対面型講義と並行して、顕微鏡を用いた病理組織学実習をおこなっていましたが、2019年4月にオリンパス社のバーチャルスライドシステムVS120を導入し、iPadと連動した実習へと移行しました。あらかじめガラス標本のスキャン画像データをサーバに格納しておき、学生は各自iPadを操作することで、簡単に顕微鏡観察と遜色ない高精細な病理組織像の観察が可能となりました。最大の利点は、インターネット環境とウェブブラウザが利用できる端末さえあれば、場所・時間を選ばず学習できることであり、コロナ禍での遠隔授業においても、病理学実習を滞りなく進めることができます。その他の利点として、カメラ機能で撮影した画像をノート作成に役立てることができる点や、顕微鏡を覗くという非日常的動作がなく心理的障壁がないという点もあげられます（反面、病理の教員としては学生の顕微鏡離れを懸念しています）。

実際の実習では、授業時間の冒頭に教員が実習の要点と病理組織像を図示しながら解説したのち

（写真）、自習形式で実習ノート作成を進めています。質問に関してはZoomのチャット機能や電子メール等に対応し、授業の節目には各自が作成した実習ノートを提出してもらうことで、可能な限りフィードバックをおこなうよう努力しています。

現在受講中の歯学科3年生を対象にGoogleフォームでアンケートをおこなったところ、全員が自宅（アパートを含む）で遠隔授業を受講していました。学生による授業評価はかなり好意的で、「外出することなく自宅で受講できる」「画面が見やすい」「周りの環境に左右されず授業に集中できる」という意見が多数ありました。困った点としては「すぐには質問しにくい」「Zoomの音声聞きにくいときがある」等の意見がありました。教員の立場からは、学生の反応がわかりにくい、学生の理解度をリアルタイムに把握しづらいという非対面型授業の欠点を実感しています。また、対面型授業を前提とした講義資料を、非対面型授業に合わせて改変する必要にも迫られています。本稿執筆時点の状況では対面型授業再開の見通しは定かではありません。今後も非対面型授業の利点を活かしつつ、学生の声をききながら授業改善策を模索しているところです。



遠隔病理学実習の風景

コロナ禍における包括歯科補綴分野の取り組み

包括歯科補綴学分野 長谷川 陽子

令和2年度は、コロナで始まりコロナで終わった印象があります。4月3日に、授業開始が4月20日に延期されること、前期は「非対面型授業」のみの実施となること、メールを通じて伝達されました。あの頃は、Zoomって何？ Skypeみたいなもの？ぐらいに思っていたのですが、今ではZoomもすっかり市民権を得て、著者もどうにか使いこなせるようになりました。

オンライン授業のスタイルは、リアルタイムでインタラクティブな授業を実施するか、授業コンテンツの動画を作成・配信し、学生が閲覧する方法の、どちらかを選択することができたため、当分野では、以前から使用していたmoodleと言うシステム上に構築された、e-learningシステムを活用することになりました。

当分野のe-learningシステムは、小林博准教授が中心的役割を担い、2009年に導入されました。現在は、堀一浩准教授と大川純平助教が管理を担当し、主に模型実習の動画配信や小テスト実施に使用しています（図1・2）。講義動画はストリーミング配信のため、ネットワークの回線が細くとも再生可能であり、好きなところで公開期間中好きなだけ再生が可能です。従って海外からも視聴可能ですから、留学中の学生も、海外留学生も、このシステムで講義受講と課題提出が出来ます。小野教授は、コロナ禍で来日できない海外在住の大学院生のために、英語での講義をこのシステムで公開しています。

このシステムを活用する利点は、

1. 学習の進捗度を一括して管理し、学習履歴を管理システムとして蓄積できる。
2. 演習問題等を即座に分析・フィードバック

することができる。

3. 受講者に、同一の教材を一律に提供することができ、受講者それぞれのペースで学習することが可能である。
 4. 公開期間中は、繰り返し視聴可能であり、復習が可能である。
 5. コース登録者との連絡や資料配付が、容易である。
 6. 単位修了後も、登録すれば再度視聴が可能である。
- など、多数挙げられます。

一方、欠点としては

- a. 学習意欲のない学生には不向き。
 - b. ビデオ編集、問題作成に時間がかかる。
 - c. 対面授業ではないため、教員の意図が読み取りづらい。
- が、挙げられます。

当科は上記のe-learningシステムを有しているため、比較的容易にオンライン授業を開始できる環境ではあったのですが、著者をはじめ教員が講義動画を製作するという行為が初めてであったため、すべてがすぐスムーズに、とはなりませんでした。

講義は、パワーポイントのプレゼンテーションを録画録音したあとに、最後に動画として出力するのですが、Macは何故か録画と録音のタイミングがずれてしまうというトラブルが必ず生じました。ならWindowsなら容易なのかというと、そうでもなく、ソフトウェアやOSのバージョンによって、いつまで経っても録画録音が保存されなかったり、録画開始のキューが出なかったりしました。

筆者も、Google先生にお伺いを立てながら講義の動画製作にとり組みましたが、実感として普段の講義の5倍疲れました。対面授業では、学生さんの顔を伺いつつ、ためになる？与太話を挟みつつ、進行速度や話す内容を調整しながら行う事ができるのですが、講義の録画録音はひたすらモニターを見ながら、冗談の一つも言わず、進めていくしかありません。また、途中嘔むと撮り直しとなり、テンションがどんどん下がっていきます。一度言い間違えたところは、何故か何度も間違えてしまうということも分かりました。TVで

よく見たNG大賞の俳優さんの気持ちが分かってしまうという、得がたい体験もできました。

後期からは、感染対策を実施した上で模型実習が開始され、第3学期はオンライン授業以外に講堂や講義室2つを同時に使用することで、対面授業も併用できることとなりました(写真1)。私達教員としては、コロナ禍によって学生皆さんの学習機会が失われることが無いよう、出来る努力はしていきたいと考えています。教員も初めてのことが多いため、ご意見や希望等あれば御連絡いただけましたら幸いです。

以上、包括歯科補綴学分野での取り組みでした。

2020有床義歯学

ダッシュボード / マイコース / 2020有床義歯学

コース名→
↓名前とメールアドレス

学生のログ記録も確認出来るため、
状況に応じて受講を促すことも可能

図1 moodleの画面例

小テストは、評点だけでなく所要時間、回答状況が即時に把握出来る

図2 moodleの画面例2



講堂での講義 ソーシャルディスタンスを保ち着席

「コロナ禍の授業」 ～口腔生命福祉学科PBLでの対応～

福祉学分野 大内章嗣



新型コロナウイルス感染症の流行下で、あらゆる活動・生活部面でこれまでにない対応が求められています。歯学部も例外でなく、授業日程の組み替え、講義・実習の方法・内容の変更、学生・教員の感染管理

など、様々な対応がありました。

口腔生命福祉学科では、歯学部全教員の皆様のご協力のもと、PBLを全面的に導入したカリキュラムを構築しておりますので、今回はコロナ禍における口腔生命福祉学科PBLでの対応をご紹介します。

○非対面でのPBLコアタイム運営方法

当初、グループ毎に作成したMLによる方法も一部試行しましたが、最終的にZoomを用いた方式に落ち着きました。

Zoomでは、①ユニットコーディネーター自身がミーティングを立ち上げ、参加学生・ファシリテーターを「ブレイクアウトルーム」機能を使って振り分ける方式と、②グループ毎のPBL専用Zoomアカウントを作成し、コーディネーターがそれぞれのZoomミーティングのスケジュール設定を行っておき、学生・ファシリテーターが各Zoomミーティングに参加する方式の二つを、各ユニットコーディネーターの判断で選択して行いました。

○Zoomを用いたPBLコアタイムの実際の流れ

PBLコアタイムの基本的な手順は、対面の時と同様ですが、学生には、事前に学務情報システムを通じて、ミーティングID、パスワードとともに、「シナリオ (PDF)」、「プロダクト記録用

ファイル (Word)」、「自己評価シート (Excel)」が示されます。

この「プロダクト記録用ファイル」(図)は、ZoomでのPBL用に新たに作成したものです。これをZoomの「画面共有」でメンバーが見ながら進めることで、PBLの各ステップに沿って議論が進むようガイドするとともに、プロダクトを共有・提出する際に形式・内容がバラバラにならないようにしたものです。併せて、ファシリテーターガイドもZoom用に修正しています。

コアタイムではファシリテーターの進行のもと、司会、記録係の学生を決め、適宜、「シナリオ」や「プロダクト記録ファイル」などを画面共有しながら議論を進めていきます。なお、ビデオ(顔出し)をONにするか、音声のみとするかはグループの決定に任せましたが、音声のみとしているところがほとんどでした。

日頃からSNSを使い慣れている世代ということもあってか、Zoomの画面共有やチャット・ファイル共有機能に加えて、スマホでの2重通信(?)も駆使しながら、議論はスムーズに行われていました。ただ、後日、学生から感想を聞いた際には、対面であれば、雰囲気や手元のノート等から、積極的に発言しないメンバーからも意見を引き出すことができたのが、Zoomでは難しく、発言者や議論が偏りがちであったとの声も聞かれました。

議論がまとまると、ファシリテーターの指示のもと、各学生は自己評価シートの記入、振り返りを行うとともに、記録係が作成した「プロダクト記録ファイル」をメンバーで共有して、1つのコアタイムが終了します。また、記録係はプロダクト記録ファイルをコーディネーターへメールで提出しますが、提出されたプロダクトを見る限り、例年と質・量ともに遜色なく、ファイル共有など

で各自の学修成果を容易に集約できるせいか、成果物としてはより充実した内容になっているケースが多くみられました。

コロナ禍のもとで、急遽行われた遠隔方式によるPBLでしたが、結果としては、大きな問題無く実施できたのではと思います。ただ、歯科衛生

士、社会福祉士という対人支援業務を担う専門職の養成という観点からは、非言語コミュニケーションを含めた他者理解やチーム内での効果的な関係形成能力など、やはり対面方式でないとなつてしまふPBLの教育効果も多いのではないかと感じています。

新潟大学歯学部 口腔生命福祉学科
「〇〇〇〇」PBL(シナリオ●)学習課題・学習成果プロダクト

注 1: コアタイムの学習課題の設定/学習成果のまとめを記録係の人が記録し、グループメンバーで共有するとともに、各提出期限までに〇〇宛、メール添付で提出してください。(学習成果のまとめは、学習課題の設定の時のファイルに追記してください。
提出先 〇〇@dent.niigata-u.ac.jp (10MB を超える添付ファイルは送信できません)

注 2: プロダクト提出の際、必ずしも、1枚にまとめる必要はありません。適宜、枠を伸ばして記入して下さい。

【コアタイム 1(シナリオ提示～学習課題の設定)】

グループ	1・2・3	記録係氏名	
シナリオ No.	●	提出期限	2020年〇月〇日(〇) 〇:〇〇まで

Step1: 配付されたシナリオを読み、事実を抽出する(事実となる部分に下線を引く)。

Step2: 【シナリオ(抽出した事実)から生じた疑問・考え】

A)
B)
C)

Step3: 【上記、疑問・考えに対する仮説(回答)】

A)
B)
C)

Step4: 【設定した学習課題】

1)
2)
3)

【コアタイム 2(学習成果の発表・検証)】

グループ	1・2・3	記録係氏名	
シナリオ No.	●	提出期限	2020年〇月〇日(〇) 〇:〇〇まで

Step5: 【各学習課題に対する学習成果】(必ず出典(書籍名(ページ)、Web アドレスなど)を明示すること)

1)

2)

3)

4)

5)

図 プロダクト記録用ファイル

早期臨床実習を終えて

いつもと違う早期臨床実習にて

歯学科1年 井上 嘉

今年度の早期臨床実習は例年とは異なるものでした。昨今の新型コロナウイルス流行のため、自宅での課題学習とZoomでのオンライン実習となってしまいました。「もしかすると」とは思っていたのですが、やはり医療現場を間近で見学できなかったことには少し残念でなりませんでした。しかし、その中でも例年にはない学びや発見があったと私は考えています。

自宅での課題学習は「全国の歯学部にある専門診療科とそれぞれの歯科領域を調べる」というものでした。この学習で私は歯科の知識量の多さと治療領域の広さに驚かされました。恥ずかしながら、私は歯科医師というと町の歯医者さんのような虫歯の治療や矯正が主な仕事であると考えていました。しかしインターネットで学習を進めていくと、まず診療科の多さに驚かされました。小児歯科や審美歯科、口腔外科など幅広い分野に対応

し人々の口の健康を支えていることに気づかされました。またそれと同時に残りの5年でしっかりと歯科の様々な知識を身に付けなければならないと気を引き締める機会となりました。

Zoomによるオンライン実習では、先生方のビデオ撮影によって病院内の様子を見学することができ、そこでいくつかの工夫に目が留まりました。小児歯科のユニットでは壁にキャラクターのイラストを貼り付けて明るい雰囲気を作ったり、緊張する患者さんのための個室が備えられていました。このような患者さんの目線に立った配慮に私は感銘を受け、今後ますます重要になると改めて感じました。

早期臨床実習は歯科医師となる第一歩であり、歯科医師としての喜びや責任の重さ、人として大切な相手への配慮の重要性を気づかせてくれるものでした。勉学はもちろん部活動にも懸命に取り組み、よりよい歯科医師となるため、そして将来社会に出る者として自分をより成長させるためにこの新潟大学歯学部で過ごす6年間を実りあるものにしていきたいと考えています。

早期臨床実習を終えて

歯学科3年 渡邊琢巳

私たち3年生は、前期に早期臨床実習Ⅱを行いました。これは、1年生の時に行われた早期臨床実習Ⅰとは異なり、より専門的になり、基礎科目と臨床科目との関連が意識された実習でした。しかし、今年は新型コロナウイルスの影響により、例年とは異なり、病院での実習を行うことができませんでした。そのため、Zoomによる基礎科目の非対面式授業と各診療科でのローテーション実習を行いました。ここでは、私が早期臨床実習Ⅱを終えて、感じたことや学んだこと、基礎科目と臨床との関連を感じた点について述べたいと思います。

まず、基礎科目と臨床との関連を特に感じたのは、歯周病科で実習を行った際でした。歯周病科での実習内容としては、主に模型実習において手用スケーラーによるスケーリングを体験しました。ここで私は今まで学んできた生理学、微生物学、生化学などさまざまな基礎科目との関連を感じました。例えば、生理学との関連として、嘔吐の誘発機序が関係していると感じました。嘔吐を誘発する原因の一つとして、舌後方・咽頭部への触・圧刺激があります。これは、舌後方や咽頭にある機械受容器が刺激されることで舌咽神経、迷走神経、交感神経の求心路を介して嘔吐中枢が刺激され、嘔吐を誘発するという機序であり、臨床においてはスケーラーなどを使って歯石を除去する際に、誤って舌後方や咽頭部を刺激しないように治療を行う必要があると感じました。また、早期臨床実習Ⅱを通して、学んだことや感じたこと

として、治療を行う際は患者さんの目線にたち、安全を第一に考えることが重要だということが挙げられます。このことは、予防歯科での実習の際に特に痛感し、自分が思っていた以上に難しく、診療の際に注意すべき点が非常に多くあると感じました。例えば、探針を使う際は、先端が鋭利なため取扱いに注意する必要があり、特に口の中に入れるときに唇や頬に引っ掛けないように気を付けなければいけないと感じました。また、ユニットを倒す時などは唐突にユニットを倒してしまうと腰が悪い患者さんなどが大変な思いをするので、倒す前に声かけをしてからユニットを倒すことが大切であると学びました。さらに、フロスなどを行う際にも押し付けるのではなく、前後に動かして歯間に入れることで患者さんが痛い思いをするのを避けることが重要であると感じました。また、その他に気を付けなければいけないこととして、患者さんにできるだけ安心してもらえるような声かけが重要だと学びました。これは、歯科治療を受けに来る患者さんの多くは不安な気持ちで来る人が多いと思うので、少しでもその不安な気持ちを和らげてもらえるように声かけをすることで、その場の空気も良くなり、患者さんだけでなく、自分にとってもプラスにつながると学びました。

早期臨床実習Ⅱを通して、ここで書いたこと以外にも非常に多くことを学び、感じました。また、その上で基礎科目と臨床との多くの関連を感じ、それぞれを別々に考えるのではなく、常に関連づけて考えることが大切だと学びました。自分の目指す歯科医師になるまでの道のりはまだまだ長いですが、これから臨床を行う立場を意識しつつ、日々精進して、学び続けていきたいと思えます。

早期臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科1年 兼田真那

私たち歯学部1年生は前期の毎週金曜日1、2限に早期臨床実習を行いました。今年は新型コロナウイルスの流行によって多くの授業がオンラインでの開講となりました。例年であれば実際に病院に行って見学、実習を行うはずだった早期臨床実習も残念ながらオンラインでの授業となってしまいました。実際に見学することはできませんでしたが、想像力を働かせて先生方の話を聞き、集中して授業に臨みました。

私はこの早期臨床実習で大きく分けて2つのことを学びました。1つは広範囲に及ぶ歯科診療領域と聞きなれない専門外来です。歯、歯茎、舌など口の中を診療するのはもちろんのこと、唇や顎骨まで診療することを初めて知りました。また、いびき外来や口臭外来といった聞きなじみのない

専門外来があることが分かりました。こういったことを把握できたのは大きな1歩だと思いました。もう1つは患者さんのことをよく考えているということです。患者さんに快適に治療を受けてもらえるように必要であれば麻酔や笑気ガスを用いるなど工夫していることが分かりました。ただ単に治療するのではなく、患者さんに合わせて治療方法を変えることを大事にされていたのが、とても印象に残っています。

1年生のうちにこのような本格的な実習を経験できたのはありがたいことだと思いました。病院の雰囲気、特色、それぞれの専門領域についてわかりやすく教えてくださった先生方、本当にありがとうございました。医療従事者になるということを感じさせられるとともに、これから学習していく糧にもなりました。学年が上がるにつれてより内容の濃い実習が増えていくと思うので、そこで先輩や先生方から多くのことを吸収できるように頑張ります。



早期臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 富 樫 奈 央

今年度の早期臨床実習は、新型コロナウイルスの流行に伴い、例年と異なりZoomでの講義が行われました。実際に現場へ行き実習を行えなかったのはとても残念ですが、講義を通して、歯科衛生士や社会福祉士が活躍する現場についての理解を深めることができ、有意義な時間となりました。

始めに、前半の授業では、それぞれの現場ごとの歯科衛生士・社会福祉士の仕事内容について聞き、同じ職業でも現場が異なれば役割や働き方が大きく変わるということが分かりました。まず、新潟市保健所の地域健康福祉センターでは、1歳6か月児健診や3歳児健診の流れについて学びました。そこでの歯科衛生士の主な業務は歯科医師の補助や保健指導であり、齲蝕予防の重要性について伝えることも重要であるということが分かりました。また、見せていただいた写真の中に待ち時間に遊ぶ親子の様子を見守る職員の方が写って

おり、親子関係の把握のために重要なことなのだと聞き驚きました。ばんだい桜園についての講義では、社会福祉士の業務内容について学び、入居者だけでなく、その家族のサポートも役割の一つであることが分かりました。

他にも、授業の後半では、バイタルサインの測定や診療ユニットの使用法など、より実践的な内容を学ぶことができました。特に、将来自分が働く中で、緊急時の対応を冷静に行うためにも、正しい対処法や知識を身に付けておくべきだと感じました。また、診療ユニットについて学んだことは後期の相互実習にも役立てることができ、より円滑に実習を行うことができました。

この授業を通して、それぞれの現場での自分の役割を理解し、患者さんやその家族の気持ちを尊重しながら健康的な生活をサポートしていくことの重要性を学ぶことができました。この先もコロナウイルスの影響で学外での実習が制限される状況が続くかもしれませんが、貴重な学びの時間を最大限活用し、自ら学ぶ姿勢を大切にしていきたいと思います。



ポリクリを終えて

ポリクリを終えて

歯学科5年 清野 貴仁

時が経つのは早いもので、私達52期生は既にポリクリを終え、最終課程となる総診での臨床実習が始まり、数ヶ月が経ちました。5年間共に学んできた友人達との学生生活も、あっという間に終わりが訪れそうに感じる今日この頃です。

今年は新型コロナウイルスの影響で例年よりも2ヶ月程対面実習が始まるのが遅れ、ポリクリも大学病院の外来での見学を行わないといった規模を縮小したものでした。そのような状況の中でも先生方のご尽力により感染対策をしっかりと行った上で相互実習を行うことができ、学生にとって大変有意義なものになったと思います。

思い返すと、ポリクリでは主体的に学ぶ機会が多かったと思います。今まではファントムを相手に行っていた処置を相互実習では人間相手に行うわけですから責任と緊張感が生まれて実習前には自分の知識不足を補うために予習をし、終わった後は復習を必ず行いました。

学年が上がる度に少しずつ臨床系の講義や実習内容が増えて、5年生になった時点では全ての教科を一通り学んだはずですが、それらはあまり身につけていなかった気がします。決して4年間で適当に過ごしてきたわけではありませんが、90分

間の講義を受動的に学んできた結果だと後悔もしました。

ポリクリの反省点を1つ挙げるとすると、「目の前の作業だけに気をとられて、周りが見えていない」ということです。ファントムを使った練習とは違い、本物の人間に対する診療では、口腔内の処置を行う部位だけでなく、全身への気配りが重要であり、今の私の場合は、1つ1つの作業に手一杯になっているように思います。今のレベルでは、全てのことを自分ひとりで行うことは難しく、インストラクターの指導や手助けが必要な場合が多々あり、患者さんに長期間、何度も通院してもらわねばならないことも充分考えられます。しかし、途中で諦めることなく、臨床実習を通して、より多くのことを学びたいと考えています。



技工室での1枚

ポリクリを終えて

歯学科5年 遠山有純

今年のポリクリはコロナウイルスの影響があり6月中旬からスタートしました。それまでは自宅でのZoom講義がメインであり家にいる時間が長かったため正直に言うとポリクリが始まる直前は体力がもつのか不安がありました。しかし、始まってみればそのような不安を意識する時間もなくなっという間に終わったなという印象です。

終わって見た今思うことはポリクリ中にもう少し色々試せばよかったなということです。ポリクリ中はいかに相手に痛みを感じさせないかということ意識しすぎていたため相互実習で相手の口腔内に触れるときはそっと触れ、本来頬粘膜を圧排するためのミラーもただ口腔内にあるだけという状況がよくありました。しかし臨床実習で患者さんを実際に治療して思うことはどうしたら痛いかを知っていることの重要性です。ここに触れたら痛い、こんな風にミラーをあてると痛い、そういうことをポリクリ中にお互いに試せばよかったなと思います。これを読んでいる後輩がもしもいたらお互いに危険のない範囲で色々試してみることをお勧めします。

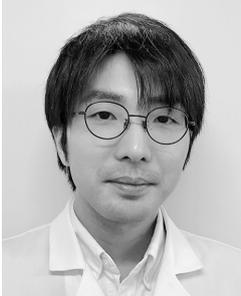
今行っている臨床実習についても少し触れます。臨床実習が始まり模型ならこのポジションで見えたのに…、頬粘膜ももっと引っ張れるのに…

とそれまでの模型実習との違いに戸惑い、模型で出来たことが患者さんには全然できないということがよくあります。出来ないことが多くあり、それに目を向けすぎると「もう駄目だ」「やっぱり無理だ」となってしまうことが私は多いです。しかし無理だと思っても患者さんは次の週にはやってきて投げ出すことももちろん出来ません。それならば復習と反省をしつつも出来るようになったことにも目を向け、少しずつでも出来ることを増やしていきたいと思います。そして、不慣れな診療に時間を割いてくださる患者さん・ライターの方先生、臨床実習の環境を整えて下さっている全ての人に感謝の気持ちを忘れず臨床実習残り10か月頑張っていきたいです。



臨床実習頑張っています

素 顔 拝 見



口腔病理学分野

阿 部 達 也

2020年4月1日付で、口腔病理学分野・助教を拝命いたしました阿部 達也（あべたつや）と申します。素颜拝見の執筆の機会をいただきましたので、自己紹介と近況を述べさせていただきます。

私は、群馬県前橋市の生まれで、大学進学と同時に新潟に参りました。大学卒業後は臨床研修のため、東京に住んでいた時期もありますが、大学院入学時にまた新潟に戻りましたので、かれこれ15年以上新潟で生活してきたこととなります。そろそろ、故郷・群馬県で暮らした時間を、新潟で過ごした期間が上回ってしまいそうですが、まだ新潟の冬の厳しさには気が滅入ってしまいました（歯学部ニュース 128号でも同じ感想を書きました…）。

新潟大学歯学部41期生として歯学部に入學し、卒業後は臨床研修を経て、新潟大学大学院に進学しました。大学院では口腔病理学を専攻し、朔敬教授のもとで口腔扁平上皮癌の癌-非癌界面の研究を行い、現在も関連した研究を継続しています。大学院修了後1年程して、新潟大学医学部臨床病理学分野・味岡洋一教授のもと、特任助教として病理診断・病理解剖・病理研究の研鑽を積む機会をいただき、この間に口腔病理専門医、細胞診専門歯科医の資格を取得できました。お二人の教授からの、病理学・形態学に関する指導は病理

研究・病理診断の礎となっています。現在は、口腔病理学・田沼順一教授のもと、研究・教育・病理診断に取り組む日々です。

趣味は一定しないのですが、ここ数年、趣味と仕事の上での実用性を兼ね、PC周辺機器沼にはまっており、5-6台のキーボードを乗り換えてきました。左右分割のエルゴノミックタイプなど、変わり種も経て、現在はオーソドックスなUS配列のメカニカルキーボードに落ち着きました。長く普遍的に使用されてきたものには意味があると実感しました。キーボード沼の住人の方はぜひ声をおかけください。

さて、私が口腔病理に異動した2020年4月は、まさにCOVID-19（新型コロナウイルス）による猛威が迫り、1回目の緊急事態宣言が国内で発出された時期でした。この原稿を書いている2021年1月現在、第三波と呼べる感染増加を示し、2021年1月初旬で1日の国内新規感染者は6千人を超え、全世界で50万人以上の新規感染が報道される未曾有の状況です。私たちの仕事も大きな転換を迫られ、学会やカンファレンス、学部の通常講義は軒並みオンライン・非対面となりました。オンライン化に最初は戸惑ったものの、活用できれば効率的・効果的なコミュニケーションを実現できる強力なツールと感じました。また、病理標本を用いる検討会や講義・実習がオンラインとの親和性が高かったことは、ポストコロナに向けても新たな可能性を考えさせるものでした。

今後、コロナ禍の早期収束を願いつつ、病理学と新潟大学歯学部の発展に貢献できるよう邁進したいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。





歯科矯正学分野

北見 公平

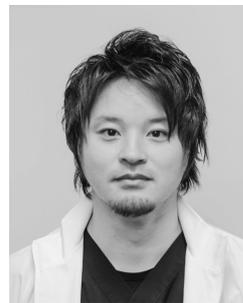
2020年4月1日付で歯科矯正学分野の助教を拝命いたしました、北見公平と申します。素顔拝見執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は千葉県北東部の香取市という茨城県との県境にある田舎町です。中学高校は利根川周辺の田園風景の中を電車に乗り、鹿島アントラーズ本拠地近くの学校に通学していました。新潟大学歯学部40期生として2010年に卒業後、本学研修プログラムBコースで研修医時代を過ごし、その後神奈川県内の大手法人歯科の勤務医として一般歯科診療に2年従事しました。そこで苦楽をともにし、愚痴を言いながら慰め合った同期入社の友人達とは、今でも強い仲間意識でつながっています。一般診療に携わるうちに矯正歯科治療の重要性を改めて感じ、出戻りのような形で2013年に母校の歯科矯正学分野大学院に進学しました。

大学院では、矯正力などの力学的負荷に対する歯根膜の生物学的解析を中心に基礎研究に従事し、院3・4年目にはアメリカ合衆国テキサス大学医学部への1年半の留学の機会を得て、顎顔面領域の骨の発生に関する研究に従事しました。新潟大学でもテキサス大学でも、上司や同僚に恵まれ、楽しく充実した時間が過ごせたことは本当に幸運だったと感じます。留学期間中は目一杯研究に没頭するのと同じくらい、休日もしっかり満喫しました。夏休みには私の妻と友人の3人で、キャンプをしながらナショナルパークをめぐるアメリカ縦断旅行なども行いました。初めころはテントを組み立てるのもおぼつかなく、組み立てている最中に突然の雷雨でテントが潰され、慌てたことも良い思い出です。また、留学したラボはテキサス州のヒューストンにあり、NASAのジョンソン宇宙センターの近くでした。そのため、地

域の日本人コミュニティの中には宇宙飛行士もあり、若田光一さんや、金井宣茂さんなどにお会いすることもありました。金井さんは、私の妻とともに個人的に交流するなどしていましたが、とても世界を代表して宇宙に行くような人とは思えない(失礼)、フランクな人でした。余談ですが、金井さんは日本人で一番若い宇宙飛行士なので、大ヒットした漫画「宇宙兄弟」にも、先輩宇宙飛行士として似顔絵が載っているそうです。

帰国し留学期間中の成果を学位論文として大学院を卒業した現在も、骨や歯根膜に関する基礎研究をつづけながら、矯正歯科臨床では学会認定医の取得に向け、日々の診療に邁進しています。これまで出会いに恵まれ、環境に恵まれ、多くの方々のご支援を頂いて、現在の立場があると考えております。今後も新潟大学歯学部や歯科矯正学分野の発展に貢献できるよう精一杯努めてまいります。皆様どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



組織再建口腔外科学分野

齋藤 大輔

令和2年4月より組織再建口腔外科学分野の助教を拝命致しました齋藤大輔です。歯学部ニュースは「大学院へいこう」以来となりますが、今回「素顔拝見」の原稿依頼をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきますと思います。

出身は新潟県新潟市です。生まれも育ちも新潟ですが、大学の6年間は神奈川県の横須賀市で大学生活を送りました。神奈川歯科大学を卒業後、新潟大学の歯科総合診療部で研修後、組織再建口腔外科学分野へ大学院生として入局させていただきました。大学院時代は自分の研究テーマが『顎変形症と骨代謝』に関する臨床研究であったた

め、前任の齊藤力名誉教授、小林正治教授のもとで臨床を続けながら顎変形症を学び、研究を行いました。大学院の4年間はとても忙しくあっという間でしたが、とても充実していたと思います。

大学院卒業後は当科の関連病院である山形県の鶴岡市立荘内病院の歯科口腔外科へ出向となりました。荘内病院は当科の関連病院のなかでもゴリゴリの口腔外科の病院でしたので、まさに武者修行でした。当初は1年間の予定でしたが、なんだかんだで3年間の武者修行となりました。荘内病院では初めて経験する症例も多く、現在自分が専門としている顎変形症の手術も最初に執刀したのは荘内病院でした。この3年間は本当に多くのことを学ばせてもらい、口腔外科医として成長させてもらいました。臨床漬けの3年を経て、平成30年4月に新潟大学に戻ってきました。これまでの臨床漬けの生活が一変し、臨床に加え、研究と教育が加わりました。現実はなかなか難しいですが、研究・教育・臨床の3本柱をバランス良くこなしたいところです。

と、ここまでは仕事の話をしてきましたが、これだけだと仕事人間と思われ誤解を招く恐れがありますので、ここからは私の趣味の話をしてもらいたいと思います。現在の私の趣味はお酒・ゴルフ・カメラです。お酒は学生時代からずっと飲んでいますが、いまは特にウイスキーにハマっています。ゴルフは大学時代にかじり始め、研修医時代からどっぷりハマりました。そしてカメラですが、これは荘内病院から新潟大学へ戻ってきたときに当科の医局では空前のカメラブームで、医局の先生の勧めでカメラを購入してからハマりました。元々口腔外科では術中写真、症例写真を撮る機会が多く、若手のころは「写真のピントが合っていない！」だの、「明るすぎて白飛びしている！！」などお叱りと指導を頂いたものです。当時は明るさ？F値？シャッタースピード？被写界深度？……携帯電話のカメラくらいしか使ったことがなかった自分にとっては、仕事と割り切り使い方をマニュアル的に覚えただけでしたが、いざ趣味となり興味を持ちだすと自分で調べ、いろいろ試し、今まで何でこんなことが分からなかつ

たのだらうと思います。興味を持つことが如何に重要かということを感じました。

さて、ここまで私の拙い文章にお付き合いくださりありがとうございました。これからも組織再建口腔外科学分野の助教として、日々努力していく所存ですので、みなさま今後ともよろしくお願いいいたします。



小児歯科・障がい者歯科

花 崎 美 華

令和2年4月1日付で小児歯科・障がい者歯科の助教を拝命しました花崎美華と申します。私は新潟大学出身（42期生）で、学生の頃よりこの歯学部ニュースを読む機会は多々ありましたが、この度素顔拝見の記事依頼をお受けする機会を頂戴し自分の立場も変わったのだなと時の流れを感じております。

自己紹介させていただきます。生まれは富山県富山市なのですが、親の仕事の都合で幼少期は新潟県の上越の糸魚川市、中越の見附市で数年ずつ過ごし、中学・高校は富山市に戻りました。大学から新潟大学に進学し、これで下越もコンプリートだと引っ越ししたのを覚えています。

大学時代は何か運動しなければと一念発起し人生初の運動部であるバドミントン部に入りました。大してうまくもありませんでしたが、日々の運動と試験の過去問入手のためにやっぱり部活に入ってよかったと思いました。よい先輩、後輩、同期に恵まれ楽しく過ごすことができました。デンタルにかこつけて行く旅行は楽しいものですし、こうして大学に残っている現在、この部活でのつながりに助けていただく機会も多くあります。

研修は新潟大学病院でないとマッチングしないのではないかという恐怖と富山に帰りたい気持ち

がせめぎあい、新潟大学Bコースで前半半年は富山県の病院を選択しました。後半はどうしたものかと考えていたところ、「就職すると女性歯科医師というだけで小児をふられるらしい」という噂を耳にして、これは大変と小児歯科学分野にお世話になることにしました。研修終了後は富山に帰るのだらうというのが元来のぼんやりとした人生設計だったのですが、半年実家で過ごしたら思いのほか窮屈ではや一人暮らしでないと耐えられない身体になってしまったことに気づき、ちょうどその頃上司に「やりたいことがないのなら大学院でモラトリアムしたらよい」的な助言をいただき、実行してみることにしました。

もともと小児の扱いには苦手意識もあり、大学院での診療は四苦八苦した思い出が強いです。泣かせてしまうこともしばしばで、保護者の方の冷たい視線にしどろもどろ言い訳したりしていましたが、患者様の成長というのは早いもので、次第に上手に治療を受けられるようになったり、学校の様子をお話ししてくれたりして、外来診療の楽しさを教えてもらいながら成長させていただきました。

大学院修了後は、一度大学を離れてみたいと思っていたところ、鹿児島県の小児歯科専門医院に就職する機会をいただき、3年間勤務しました。雪の代わりに灰が降る環境は新鮮でしたが、開業医ならではのスピード感や簡潔明瞭な患者説明の重要性など歯科医師として学ぶことも多くありました。鳥刺しがスーパーに売っているところも非常によかったです。

この春よりまた母校に勤務する機会を得、つくづく計画性のない人生だと自分でも思います。しかし振り返ってみれば、その場その場で一番面白そうな進路に飛びつく、というのはスタンスとして一貫しているのかなというのが感想です。

本当に自己紹介だけで終わってしまいました。こんな未熟者ではございますが、今後とも何卒よろしく願いいたします。

※



義歯診療科

村上 和裕

令和2年5月1日付で義歯診療科の助教を拝命致しました、村上和裕と申します。コロナ禍真っ只中の着任であったために、他分野の先生方と交流する機会が無かったので、このような自己紹介の機会をいただき非常にありがたく思います。

私は兵庫県宝塚市出身で、小・中・高、大学、大学院全てが大阪ののどかな田舎町にありました。大学時代はバスケットボール部に所属し、パーティーピーポーな仲間にも囲まれ、良くも悪くもいろんな経験をしました。また、ラーメンが好物で、大学の放課後によく大阪・兵庫・京都のラーメン屋巡りをしておりました。

もともと開業志向でしたが、私が大学に残りたいと思ったきっかけは顎顔面補綴診療でした。出身大学の大阪大学歯学部では、当時准教授をされていた小野高裕先生（現包括歯科補綴学分野教授）の診療グループが、顎顔面領域の腫瘍患者に対する補綴治療を行っていました。6年次の病院実習で「噛めない」どころか「しゃべれない、飲み込めない」といった口腔機能が著しく低下した腫瘍切除患者に対して、どのような治療やリハビリを行えば最善の状態にできるかを議論し実践していく先輩方のカッコイイ背中を見て、一般開業医では絶対にできない、やりがいのある顎顔面補綴診療をしたいと思い、大学に残る決心をしました。大学院では新潟大学や食品会社とコラボして「食品の機械的特性と摂食嚥下様相の関係性」について研究を行い、今後もライフサイクルにおける口腔機能と食と健康について研究していきたいと考えております。

生まれて初めて違う生活圏に移住することにな

りましたが、新潟に移住してまず思ったことは、「ラーメンの味が合わない」でした。新潟県民の方に喧嘩を売る気は全くありませんが、同僚や学生にオススメのラーメン屋を教えてもらい食べに行っても、何度も行きたいと思える味にはまだ出会えておりません。私は週に最低2回は通う天下一品LOVERですが、天下一品が新潟には一軒も無いことに大変驚き（絶望し）ました。もしも平打ち細麺の豚骨醤油ラーメンで美味しい店を知っていましたら、是非教えてください。しかしながら、米や日本酒、魚介類は本当に美味しいし、スーパーではレジのおばちゃんが袋詰めまでしてくれますし（新潟に来て一番感動しました）、最

近エスカレーターに乗ったら無意識のうちに左側に立つようになったりしている（大阪では右側に立つ）、このまま1年くらい経ったら「ここが私のアナザースカイ！」とか叫んでいるかもしれません。他にも書き切れないほどのカルチャーショックを受けていますが、小野高裕教授をはじめ、分野スタッフや病院スタッフの方々のおかげで、非常に充実した新潟ライフを過ごしております。

最後になりましたが、新潟大学に少しでも貢献できるように努力していく所存ですので今後とも何卒宜しくお願い致します。



留学報告

高度口腔機能教育研究センター
山田 友里恵

2020年1月より、ミズーリ州セントルイスにあるWashington University St. Louis (WashU) に留学する機会をいただき、visiting researcherとして研究に勤んでいます。一般的な留学報告と同様の形式でこちらの様子をご紹介しますと思ったのですが、やめます。COVID-19パンデミックをアメリカで過ごすという、全く予測していなかった事態に遭遇しました。こんな人類未曾有の危機の中、留学報告をすることはなかなかないと思うので、パンデミックにより研究室や生活がどんな風変わったか、ということにフォーカスしてお話ししたいと思います。

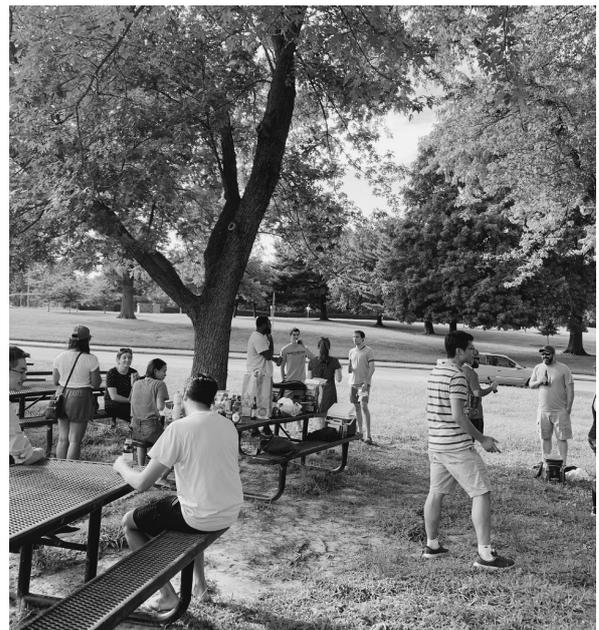
まずは簡単に留学先の紹介をします。WashUは全米大学ランキングで毎年トップ10にランクインするトップレベルの教育機関であり、研究面では各分野で世界をリードする最先端の研究が行われています。私は現在、Department of GeneticsのJeffrey Milbrandt教授の研究室に所属しています。遺伝性末梢神経変性疾患のモデルラットを使用して、病態と発生機序の解明を

テーマに、日夜研究に励んでいます。

1月に渡米し、生活がやっと落ち着いてきた2月頃から、ニュースでCOVIDの報道が増えてきました。ただ、対岸の火事といった感じで、危機感は何もありません。それが3月1週目にアメリカ国内で感染者が急増し、あっという間に3月下旬にstay at homeオーダーが出ました。そこから2ヶ月間、全くラボに行けません。この間は孤独で本当に辛かったです。5月下旬からラボに行けるようになりましたが、social distanceを確保するために、シフトワークでラボ内の人数を制限することになりました。私は朝シフトだったので、7時から終了時刻までノンストップで実験を詰めこみ、帰宅後は夜までデスクワーク。その後シャワー浴びてビール飲んで就寝、翌朝5時起床。この生活スタイルを現在までずっと続けています。限られた時間でいかに効率よく作業するか考えながら実験しているので、このスタイルで生産性が低下したとは思いません。むしろベンチとデスクで頭を切り替えてそれぞれ集中できるの



Black lives matterの暴動対策で、スーパーの窓ガラスに木板が打ち付けられている



ラボメンバーのお別れ会。多くのレストランはテイクアウトのみなので、公園で。

で、私は気に入っています。ただ、ミーティングがオンラインになってしまったことは残念です。毎週のラボミーティング、3週間に1回のボスとのミーティングも全てオンラインです。ジェスチャーなしで、相手の表情を伺えずに英語でプレゼンテーションするのはかなり大変です。どうしたら聞き手が理解しやすいか、要・不要な情報の選別、スライドを工夫してプレゼンするようになりました。

この原稿を書いている今、ちょうどアメリカに来て一年経ちました。色々な意味で忘れられない

一年間でした。こんな時期でも、留学できたのは本当によかったです。こちらで学んだこと、経験したこと、出会えた人たち全てが私のかけがえの無い財産です。このような貴重な機会を与えてくださった前田学部長、大峽教授、瀬尾教授に深く感謝しております。また、日本でのプロジェクトを引き継いでくださった丹原先生、留学中もエールを送り続けてくださる高度口腔機能教育研究センター、口腔解剖学分野の先生方に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。



Living the movie: From Chile to Japan

Division of Oral and Maxillofacial Radiology
Jorge Eduardo Saez Chandia

It was 1994 that a little Jorge Saez, only 7 years old, was about to start a new day. After greeting his mother and sister, the little boy started to eat breakfast. It was that Saturday morning when for the first time the animated series Captain Tsubasa was transmitted on Chilean television. And since then my interest in that far away country on the other side of the ocean called Japan was awakened.

Life went on and in 2005 I started studying engineering. That year I quickly realized that it was not what I wanted. So with my parents' support I decided to take a completely different turn and enter a career in the health field. Thanks to a series of fortunate events I entered to study dentistry at the University of Valparaiso in 2006. After obtaining my dental surgery degree, I began my career as a specialist in oral and maxillofacial radiology at the University of the Andes. It was here that I discovered my passion for new technologies applied to oral medicine.

Sometime later, life presented a new opportunity. To know Japan, and not only to travel, but to live for a while there. My nervous heart of excitement did not hesitate to support my wife 100% and we came to Niigata.

We have been in here for two years now. We have had the opportunity to get to know much of what I once dreamed of as a child. We visited temples, cities and beautiful parks. The most impressive moment of this adventure so far was the possibility to climb Mount Fuji to its summit; I think it is an unforgettable experience. The effort and facing the adversity to finally reach the summit is without a doubt an experience that will treasure with me for the rest of my life.

During this time, we have also met valuable people, kind and willing to help us. I personally have been lucky enough to work side by side with people I never imagined I would meet; people of sacrifice and effort who give their best every day to get ahead. I am grateful for the opportunity to know their stories and see their way of facing life.



I hope to continue having the opportunity to meet new places and new people, each with their own stories. I have nothing left to do but thank everyone who has given me a hand, helped me and believed in me. **“Gracias Totales”**.

Remember, if you have come this far it is because you have done well, keep being a good person, trust your knowledge, and never stop dreaming.



退職によせて

よく遊び、よく学べ…ゆとりは自分で作るもの

顎顔面口腔外科学分野 高木 律 男



今年3月末をもって定年退職となります。故郷の長野県飯田市から新潟に来て早くも47年が経過しました。この間、上越市の頸南病院に2年半、アメリカに半年、計3年間新潟市を離

れましたが、それ以外はずっと新潟市でした。当初、海のない長野県から来て、米や魚のおいしさに圧倒され、夏になり枝豆も加わり、さらに日本酒の美味さも加わり、完全に新潟人となりました。長い間お世話になった歯学部から離任するということで、学生時代からの思い出話を皆さんへのメッセージとしたいと思います。

学生時代にはサッカー部に所属していました。所属する予定ではありませんでした。全学の陸上部に所属しました。そんなある日、学年対抗のサッカー大会があり、サッカー部の大先輩の北林先輩がキーパーを務める4年生チーム（サッカー部の大木葉先輩や北村先輩も同じ学年）に、私が入れた1点で勝利しました。クラスが集まり祝勝会の会場にて、乾杯と同時に「入部おめでとう」ということで、サッカー部入部が決まりました。以後、練習と酒の日々が始まりました。

当時学部の2年目は授業時間に余裕がありました。サッカー部の友人・垣内さんが根っからの映画狂で、「面白くない映画を見ないと、面白い映画の良さは分からない」という言葉に感化され、年間248本を見ました。当時は二本立てや三本立ての映画館もあり、尻が痛くなるほど映画館に座っていたことも何日かありました。おかげで、B級映画、怖い映画などなど、広い映画館の中、

たった一人では見るに耐えられない映画も見ました。後に親族となった大杉漣さんと話が合うという、何が良い方向に向くかわからないと思い起こしています。

そんな生活の中でも、授業は朝から出ていました。それだけが勉強時間だったからですが、まさに良く遊び、よく？学びであったと思います。さらにこれらの遊びの中から、人と話をするのが好きになり、臨床実習以後、患者さんと世間話をしながらの治療が楽しみでした。

口腔外科に残るきっかけもサッカー部でした。後援会長の大橋靖教授との出会いは、私がマネージャーをしていた当時のことでした。厳格な先生で、たぶん誰も近寄りたがたい存在であったと思います。その第二口腔外科（現顎顔面口腔外科）には、サッカー部と一緒に汗を流した永山先輩、高橋先輩が在籍していました。気が付いたら第二口腔外科に入局していました。

そもそも口腔外科は学生の時にはほとんど実習できるわけでもないですし、覚える内容は多岐にわたり、卒後1年でそれを臨床に活かすことなどできるはずがありません。とにかく、叱られても、文句を言われても、経験することで成長します。1年目に先輩の傘の下でどれだけ叱られながら経験できるかが勝負です。2年目になって後輩ができると、後輩の前で叱られることはプライドが許さず、徐々に引っ込むようになります。しかし、1年目に1度でも経験していると、次の年の1年生とは異なります。幸い厳しくも優しい先輩に恵まれ、夏休みのお盆の時には「じゃ夏休み取るからよろしく」…気が付いたら、お盆の数日入院患者さんは少ないものの1年目に一人で管理をすることになりました。急患で歯肉癌の患者さんが紹介されて来てあたふたしたのを忘れません。入院患者さんの管理は、医療の本質に迫るものであり、数か月でも是非経験してほしいと思います。

ゴルフは卒後2年目に始めました。大橋先生が約1年間在外研究員として留学されていたこともあり、その間に同級生に誘われて始めたのですが、もともと自然が好きで、管理された綺麗な芝・グリーン、そして倶楽部ハウスなどのたたずまいに、何処かあこがれていたセレブの世界に入った気分になりました。以後、頸南病院時代、アメリカ留学中と2回に渡り入れ込んだ時期がありましたが、我流ゴルフで昼の飲酒が楽しみという不真面目ゴルファーでした。先代の大橋先生は、そのあたりを見直すようにと言うことで、ゴルフ部の顧問に押し付けてくださったのかと感じます。しかし、性格は変えられず、逆にゴルフ部は親睦会的になってしまったのではないのでしょうか。部員、特に大橋先生時代にゴルフ部を作り上げてきた先生方、石田コーチには申し訳なく思っています。それでも、重谷先生はじめ多くの先生方の協力のもと、ゴルフ部とともにゴルフを続けてこられたこと（健康であること）が一番の喜びです。結果がすべてではありませんが、競技ゴルフでは勝ち負けは大きく、歯学体（デンタル）でも優勝する選手が数名でも出たことは良き思いであり誇りでもあります。競技ゴルフをしていなかった私が最初で最後に歯学体のエキシビションに参加できると思った昨年、新潟大学歯学部ゴルフ部が主催予定であった歯学体がCOVID-19蔓延

で中止になってしまいました。

もう一つ大橋先生から引き継がせていただいたのが、口唇裂・口蓋裂の治療でした。大橋先生が1983年から取り入れたHotz床併用二段階口蓋形成法は、医局を挙げてずっと継続している研究で、臨床のみでなく、基礎研究としても多くの大学院生を生みだし、臨床に活かしてきています。今は、医歯学総合病院として、一つの口蓋裂診療チームとなり、形成外科や歯科矯正、言語治療室などとのチーム医療の輪を広げています。これとは別に、ミャンマーのヤンゴン大学歯学部と姉妹校となったことから、ここ数年は口蓋裂症例を中心とする医療支援を経験させてもらい、6年間で60症例の手術と現地での日常を通して、留学とは違うカルチャーショックを感じました。

「あるがままに」頑張ってきた大学生生活48年（教授生活22年を含む）でした。その他に留学のこと、仕事のことは同窓会誌にも書かせていただきました。いろいろと紙面を使わせていただき感謝です。今は皆様のおかげで、良く学び、良く遊び、良く仕事をしてきたと燃え尽きる寸前と感じています。

最後に、今後ますます新潟大学歯学部のご発展と関係各位学生諸君のご健康を祈念し、退職の言葉とさせていただきます。長年、お世話になりました。ありがとうございました。

退職に寄せて

口腔保健学分野 山崎和久

新潟大学に籍を置くようになってから早いもので40年が経ち、退職の時を迎えることになりました。退職前最後の年が新型コロナウイルス感染症の蔓延で、予定していた行事が中止や先送りになるなどの混乱は予想もしていませんでしたが、個人的には大過なく節目の時を迎えられることに感謝しております。一番の思い出は研究に係ることですので、それについて書かせていただきます。

私は神奈川歯科大学を1980年に卒業しました。在学中は、大学院に進むなど全く考えておらず、卒業したら開業医にしばらく勤めてから開業するのかなと漠然と思っていました。ところが、臨床実習もほぼ3分の2を終え夏休みにはいる直前、歯周病学の教授に呼び出され、新潟大学の原耕二教授が新潟出身者をリクルートしているので会っただけ会ってほしいと言われました。教授の頼みにNOと言えるはずもなく、生家のある十日町に帰るのに回り道をして、原先生のお部屋を訪ねたのが研究者としての道を選ぶことになる第1の転換点でした。

原先生は就任されて5年足らずの新進気鋭、やる気満々の教授で、歯周病学の重要性を熱く語る姿に引き寄せられ歯科保存学第2講座（当時）に残ることになってしまいました。同期入局者10名を含めても総勢20数名の医局でしたので、原先生が人探しをしていたのも納得した次第です。研究生から大学院に入学し、親からは大学院だけという約束で診療やアルバイトをしながらの研究生活が始まりました。古き良きアットホームな医局では同期や先輩先生に本当に恵まれ、多くのことを学ぶことができました。当時の仲間とは毎年温泉での忘年会で旧交を温めています（写真1）。

1980年代から90年代は歯周病学、歯周治療学が最も急激に発展した時期と言っても過言ではないと思います。red complex細菌の概念が発表され、次々とクローニングされた炎症性サイトカインや骨代謝関連遺伝子、明らかになった免疫細胞の表面マーカーなどをターゲットにして病因論研

究が隆盛しました。GTR法の基本概念が示されたのがこの時期です。学問の進歩を肌で感じながら知識を得、研究ができたことは大変幸運でした。

学位の研究は口腔生化学の野原廣美教授のご指導を受けました。野原先生のお人柄は、ご逝去された際に追悼文として同窓会誌に書かせていただいたので、詳細は割愛しますが、本当に素晴らしい先生でした。野原先生をはじめ生化学の先生方や原先生の薫陶を受け、早朝から深夜まで実験をするという大学院生らしい大学院生活を送り、無事に学位論文をまとめることができました。研究することの意義や楽しさ（もちろんつらいことも多々あった訳ですが）を学んだこの時期が第2の転換点でした。大学院終了後は付属病院の助手に採用され、診療、教育、研究の3足の草鞋を履き、日々奮闘していましたが、縁あってオーストラリアのクイーンズランド大学に留学する機会を得ることができました。

留学先のボスであったGregory. J. Seymour教授は歯周病の免疫病理学における若手の世界的研究者でしたが、研究者としてはもちろん、臨床家、教育者、家庭人としても素晴らしい方で、今でも家族ぐるみで付き合いのある彼との出会いがなければ、その後の人生はなかったと思っています（写真2）。自分自身の研究が海外でも知られるようになる前は、彼のラボでポスドクをしたことで、海外の学会にでかけた際に多くの知己を得ることができました。この留学が第3のそして最大の転換点でした。



写真1 忘年会
2017年12月撮影

帰国後は新たな研究テーマとしてT細胞に焦点をあてて歯周病の免疫病因メカニズムの研究を始めました。今と違って研究費も潤沢にあった訳ではありませんでしたので、ピペットチップを洗って再利用するという、今の院生からは考えられないような状況でしたが、全く気にはなりません。一つの研究から新たな疑問とアイデアが浮かび、それが科研費の獲得と新たな研究につながるといういい循環が生まれました。T細胞研究から一つの認識抗原を同定しましたが、その分子が動脈硬化症に関与していることを知り、歯周病と全身の関連研究に発展していきました。

2004年に新設となった歯学部口腔生命福祉学科に異動しましたが、周囲の理解もあって変わらず研究をつづけることができました。外来患者さんの協力による臨床研究で関連に確証を得て、マウスを使った因果解明に取り掛かったのですが、それまで提唱されていたメカニズムとの矛盾に悩んでしまいました。たまたま腸内細菌の論文にたどり着き、口腸関連に注目しました。飲み込まれた歯周病原細菌が腸内細菌叢を変化させ、全身に悪影響を与えるのではという仮説の樹立に至りました。最初は解析を依頼した共同研究者も“ホンマかいな？”と半信半疑でしたが、2014年に発表し

た論文の反響は大きく、2020年12月現在で150を超える引用回数を誇り、新たな学問分野として認知されてきました。口腸関連研究で科学研究費の基盤Aを2回連続で採択されるという幸運にも恵まれ、研究は順調に進み、それまでの一連の成果が評価され、2016年にIADRからDistinguished Scientist Award (写真3)、2020年に日本歯科医学会会長賞を授与されました。

溢れ出る研究のアイデアを形にするため実験をしてデータを出してくれたのはこれまで指導してきた大学院生などです。彼らの頑張りなくしてここまでの成果はありませんでした。在職中に29名の学位研究の指導を行いました。そのほとんどが数々の賞を受賞し、特に5名はIADR Hatton Awardの日本代表に選ばれ、7名の留学をお世話しました。その人達がそれぞれの立場で活躍していることは私の誇りでもあります。

最後に、ここまで来られたのは、節目節目で素晴らしい人達に恵まれたということに尽きると思います。どんな時もサポートしてくれた両親・家族には感謝の言葉もありません。

これまでにお世話になった全ての方々に感謝しつつ、新潟大学歯学部の益々の発展を祈りながら筆を置かせていただきます。



写真2 留学時



写真3 IADR授賞式

学会受賞報告

日本歯周病学会 学術賞

令和2年度 日本歯周病学会学術賞 受賞報告

高度口腔機能教育研究センター 前川 知 樹

この度、令和2年度日本歯周病学会学術賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。日本歯周病学会学術賞は、歯周病学において継続して優れた業績をあげた研究者を対象としており、受賞課題名は「内因性抗炎症分子DEL-1誘導における歯周病治療法の基盤研究」です。本賞はこれまでに発表した学術雑誌10報を選考対象としており、新規性・独創性・発展性・応用性から審査されます。

歯周病は歯の喪失による生活の質の低下に限らず、心疾患や関節リウマチ等の全身疾患の発症および増悪に寄与することが示唆されています。私は歯周病の制御を目指し、抗炎症作用を持つDEL-1分子に着目した研究を推進してきました。DEL-1は炎症の進展に反し減少しており、DEL-1

の接種による炎症の制御と骨破壊の抑制が見込まれます。そこで、マウスおよびサルを使用した実験的歯周炎モデルにてDEL-1の効果を示しました。さらにDEL-1には、骨代謝や炎症制御の他に、幹細胞の増殖と分化誘導機能があることや、老化とともに減少することで加齢性炎症による全身の炎症と骨破壊を引き起こすことも明らかになりました。今後はDEL-1の誘導による新しい歯周病治療および骨再生療法への展開を目指していこうと考えています。興味を持たれたかたはぜひ一緒に研究をしてみませんか。ご連絡お待ちしております。

今回の受賞にあたりご推薦いただきました多部田康一教授および研究協力いただいた先生方に心より感謝申し上げます。



学術賞の盾

IADR/Unilever Hatton Divisional Awardを受賞して

歯周診断・再建学分野 山崎 恭子

2019年夏に東京で行われましたIADR Hatton Award国内選考会においてIADR/Unilever Hatton Divisional Awardを受賞し2020年度IADR学術大会においてHatton Award2020最終選考（Web開催）に参加いたしましたのでご報告申し上げます。

演題名は“Oral pathobionts aggravate NAFLD through modulation of gut dysbiosis.”です。歯周病原細菌の嚥下により引き起こされる腸内細菌叢の変動が、肝疾患であるNAFLDの病態悪化を誘導するメカニズムについてマウスを用いた動物実験を行い、その成果を発表いたしました。我々の研究班では以前から歯周病と全身疾患の関連について、腸内細菌叢の変動をキーワードにそのメカニズムの探索を行っています。これまでに、代表的な歯周病原細菌である *Porphyromonas gingivalis* の経口投与が腸内

細菌叢の変動を介し内毒素血症を誘導し、さらにインスリン抵抗性と全身性の炎症をもたらすことを報告してきました。(Arimatsu K *et al.*, Sci Rep. 2014) 病態への影響を明確にするため、今回実際の疾患モデルとしてNAFLDモデルマウスを使用し、腸内細菌叢・血清メタボロームの変動とそれに伴う肝病態の悪化を確認しました。

現在腸内細菌叢というテーマは雑誌やテレビでも多数取り上げられており、一般社会に広く知られています。我々の研究により全身の健康における口腔の重要性を世界に発信したいと願っています。

最後になりましたが受賞にあたり研究のご指導をいただきました山崎和久教授、並びに歯周診断・再建学分野の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

日本小児口腔外科学会 学術奨励賞を受賞して

新潟大学医歯学総合病院薬剤部 顎顔面口腔外科学分野 吉田 謙 介



はじめまして。新潟大学医歯学総合病院薬剤部に所属しております。吉田謙介と申します。現在、東3階病棟専任薬剤師として歯科医師の先生方と一緒に仕事をさせて頂きながら、社会人大学院生として顎顔面口腔外科学分野で臨床研究を学ばせて頂いております。

この度、2020年度日本小児口腔外科学会学術奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。演題名は「小児口腔外科症例の処方投薬に関する疑義照会の検討」です。

薬剤師業務の一つ、疑義照会（薬剤師が処方内容に疑問点や不明点を感じた場合、処方医に内容の確認を行うこと）において、乳幼児から超高齢者まで幅広い年代の患者が入院し、対象疾患も

様々である歯科病棟を対象としたものはこれまで報告がありません。今回、病棟担当薬剤師による疑義照会の中で口腔外科疾患を有する小児患者に着目し、検討を行いました。その結果、疑義照会が行われた小児患者はすべて処方変更があり、内訳は用法用量に関する内容でした。小児患者では個体間変動の大きいことを念頭に、最新体重の把握に努め、適正な薬剤の用量を設計し、処方する必要があったと考えられました。

社会人大学院生の期間に3度目となる受賞をすることができました。こうした研究を薬剤師の視点から継続し、医療の現場へ貢献できるように尽力したいと思います。

最後になりましたが、本研究遂行にあたりご指導を頂きました顎顔面口腔外科学分野の高木律男教授、児玉泰光先生、ならびにご協力頂きました全ての先生方に心より感謝申し上げます。

学会受賞報告

小児歯科学分野 野上 有紀子

この度、第37回日本障害者歯科学会学術大会にてプロフィラックス賞を受賞いたしました。今回の学術大会は横須賀での開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けWeb開催となりました。視聴側としましてはスケジュールをアレンジできる自由度の高い学会大会となりました。そのような中、「一時保護所における被虐待児童の歯種別う蝕有病率に関する報告」と題した発表にて賞を頂戴し大変光栄に存じます。

私ども小児歯科学分野で社会貢献の一環として一時保護児童の歯科健診、歯科保健指導を継続して行っている健診結果を基にご報告いたしました。被虐待児童においては、小児のう蝕好発部位が萌出後の早い段階で罹患しており、歯種によっ

ては重度う蝕に罹患している一方で、う蝕保有のない小児も存在し、二極化傾向にあるとの結果を得ました。歯科医師、歯科衛生士は身近にいる不適切な養育環境下の子どもや保護者に早期より関わることができる位置にいます。そのため、患児の口腔内の情報を軸に背景にある養育環境の変化から“気づき”を得て、対応していくことが期待されています。

今回の賞は、新潟市歯科医師会、児童相談所・一時保護所、新潟大学口腔生命福祉学科、医局の先生方のご理解とご協力により頂戴できたものと存じます。また、ご指導下さった早崎治明教授、齊藤一誠先生、中村由紀先生をはじめ、小児歯科学分野の先生方に心より感謝申し上げます。



第48回日本歯科麻酔学会学術集会 最優秀発表賞（デンツプライシロナ賞）受賞報告

歯科麻酔学分野 小山 祐 平

この度、第48回日本歯科麻酔学会学術集会において日本歯科麻酔学会最優秀発表賞（デンツプライシロナ賞）を受賞しましたので報告いたします。演題名は「脂肪組織由来幹細胞の抽出物が神経系細胞に及ぼす効果の検討」です。

今年は当初、徳島での開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のため、学会初のウェブ開催となり、演題発表はZoomウェビナーでの発表形式となりました。初の発表形式にちょっとした戸惑いもありましたが、程よい緊張感で、発表に臨むことができました。

本研究は、マウスの脂肪組織より幹細胞（Adipose-derived Stem Cells : ADSCs）を培養し、そこから細胞膜成分を除去した抽出物（cell extract : CE）の末梢神経再生に及ぼす効果を、CEに発現する血管新生タンパク質の解析、Schwann細胞増殖能への効果、ラット脊髄後根神経節由来ニューロンの突起伸長効果、下歯槽神

経損傷モデルにおける神経再生能の評価の面から検討しました。

その結果、CEに含まれる成分は、ADSCsと同様に神経系細胞に対し、促進的な効果があることがわかりました。

本研究は、末梢神経の再生を通して、下歯槽神経の損傷によって引き起こされる痛みや異常感覚を改善する可能性のある将来の臨床に繋がる研究です。

なお、授賞式は、来年、北海道札幌市にて開催予定の第49回学術集会で行われる予定です。

今回の受賞を励みに、今後も研究活動に邁進していきたいと思っております。

最後に、ご指導を賜りました岸本直隆先生、瀬尾憲司教授、医局の先生方、ご意見をいただきました先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

技工部だより

歯科技工部門 川 島 美 咲

初めまして、診療支援部歯科技工部門歯科技工士の川島美咲です。私は2019年4月より新潟大学医歯学総合病院診療支援部歯科技工部門の歯科技工士として日々、業務に励んでおります。

私は岐阜県出身で地元の歯科技工士専門学校を卒業した後、大阪大学歯学部附属病院の歯科技工士研修制度を利用して、1年間基本的な臨床技術や知識を学びました。そこで新潟大学の歯科技工部門の求人を目にして応募しました。

新潟は今まで来たことがなかった場所で未知でしたがすごく住みやすく、自分自身とても気に入っていますし家族や友人が来てくれた時もとても楽しんで貰えます。

また岐阜は海がない県なのでいまだに海に行くと少しワクワクします。

ただ、今年初めて新潟の雪を経験しました。今まで住んできたところと違って風が強いので体感温度がかなり低いです。雪の量は地元とそんなに

変わらないのですが風がある影響でかなり寒いのでまだまだ慣れるのは大変だなあと感じます。

専門学校を卒業してそのまま就職するのは不安だったため、もう少し実践的なことが学びたいと思い大阪に行ったのですが、そこではじめて顎補綴という分野を知りました。

そして興味を持ち、当時徳島で開催された学会にも参加しました。

せっかく学んだことを生かしたいと思っていたところこの求人を見て応募したところ縁あって採用をいただきました。

新潟に来て早いことにもう少しで2年が経とうとしています。

一昨年の長崎での顎顔面技工学会での発表など、なかなかラボに就職していたらできなかった経験ができていてとても新鮮です。

まだまだ未熟ですがこれからもよろしく願いいたします。

技工部だより

歯科技工部門 藤石美穂



2019年6月より診療支援部門 歯科技工部門に勤務しております。

歯科技工士の藤石美穂と申します。三条生まれ、途中長野県の諏訪地方に12年住んでおりました。趣味は音楽を聴

くことでバンドのライブに行くのが好きなのですが生憎のご時世で去年からご無沙汰しております。それまではライブ目的で東京くらいだと「ちょっとそこまで」気分、日帰りでひょいっと行っていました。今は代替りの趣味を模索中です。

技工の話に戻りますが、明倫短期大学を卒業後こちらに来る前は技工所に勤めておりました。

主に義歯をやっておりましたが完全分業制で、試適時の排列とワイヤー屈曲を担当していました。分業制は設計に携わることもなく、ここでのやり方とは全く違うので最初はかなり戸惑いまし

た。そもそも勉強する機会もなかったなんて言い訳ですが、自分の知識不足に気落ちすることもしばしばです。このまま分業で一部分の経験しか積みせずに他で通用せずに一生を終えることに不安を感じ転職を考えました。

ここでは技工全般の業務を担うので覚える事が多いので大変に感じますが、まず普通の技工所ではお目にかかれない症例を見る事ができることに驚きました。

入職して2か月ほどでホッツ床をやるとは思っていませんでした。患者さんにもお会いしたことが無かったので診療を見学させて頂いた時に患者さんが不安に思っていることなどを聞いて気づくこともあり、もっと良い物を作らなければと思いました。

まだまだ知識に乏しく、ご不便をかけることもございますが成長すべく頑張っていきたいです。

新潟歯学会報告

令和2年度 新潟歯学会第2回例会報告

令和2年度新潟歯学会集会幹事
摂食嚥下リハビリテーション学分野
辻村 恭憲

令和2年度新潟歯学会第2回例会が11月7日(土)に開催されました。前回と同様、新型コロナウイルス感染症対策として、会場は新潟医療人育成センター、会場参加者を演者(共同演者を含める)と評議員に限定させていただきました。今回から演者の演台には、アクリル製の透明パーティションが常設されており、新潟医療人育成センターでも新たな対策が講じられていると感じました。集会係としては、受付にアルコール消毒液を準備し、演者毎にマイクとPCのアルコール清拭を行うなどの対策を実施しました。

前回は参加者(会場およびZoom)を演者と評議員に限定しましたが、今回は事前申請を条件として、希望される会員の方にはZoom参加していただくことができました。学会当日は、学外1名を含む77名(Zoom参加9名)の会員にご参加い

ただき、一般口演17題の発表が行われました。大学院生の先生方を中心に日頃の研究成果が報告され、発表後には活発な質疑応答が行われました。座長をお引き受けいただいた先生方、演者および参加された会員の皆様ありがとうございました。

令和3年度新潟歯学会総会は、4月17日(土)に新潟医療人育成センターで開催予定です。現時点では歯学部施設使用の目処が立っていないため、今年度と同じく別会場で開催せざるを得ない状況です。新型コロナウイルス感染症が早く収束して、会員の皆様に歯学部講堂へお集まりいただき、通常通りに開催できることを願っています。新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページをご覧ください(<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>)。



会場風景 1



会場風景 2



発表の様子



同窓会だより

同窓会だより

副会長 野内 昭 宏

2019年年末に中国で初発したといわれる新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に世界中に蔓延して猛威を振るっています。この原稿を執筆している2021年正月現在、日本では4千人/日を、東京でも1千人/日を超える新規感染者が発生する日があるという、衝撃的な数字となっています。

当同窓会の活動も大きな影響を受けています。集会形式の集まりは原則中止または延期とする代わりに、リモート形式で可能な事業は極力開催致しました。それはまた、遠方の会員との情報交換が容易なものになるという思わぬメリットを生み出しました。

例えば、3年ごとに行っていて今年度開催の巡りに当たった支部長会議には、全国で19ある支部のうち北海道～近畿の16の支部長が一堂に会して情報交換を行いました。この高い出席率は初めてで、リモートだからこそできたことだろうと思います。



支部長会議の様子

また、2020年11月に開催した学術セミナーでは、2018年3月いっぱいをもって大学を退職され

た福島正義先生（歯学科8期生）から「超高齢化先進地域における超高齢者歯科—臨床奮戦する名誉教授のつばやき—」という演題でご講演頂いたのですが、福島先生は勤務されている福島県昭和村から講演されており、受講者は、遠くは北海道～近くは昭和村の隣町の会津若松まで、全国津々浦々に及びました。



講演中の福島先生

当同窓会の会員は、約1/3が県内に、約1/3が上越新幹線沿線に、残り約1/3がその他の全国各地や海外に在住されています。以前から、特に遠方に在住する会員に対してのサービスが問題になっていたのですが、このようなりモート開催で物理的な距離を一気に縮めることができるようになり、事業の可能性の幅も広がると考えられます。

日々感染の恐怖におびえ、自粛生活によるストレスや、先の見通せない不安や焦燥感の中にいる私たちですが、マイナスのことばかりを考えるのではなく、新しい時代いかに対応して新しい価値や制度等を創成できるのか、また、いかに自分を変えていけるのかを考えていく、そのようなチャンスととらえてみたいと思います。





令和2年度新潟大学歯学部同窓会
 学術セミナーⅢ
 超高齢化先進地域における超高齢者歯科
 ―臨床奮戦する名誉教授のつづやき―を受講して

口腔生命福祉学科12期 春 山 海 帆

今回、新潟大学歯学部OGとして学術セミナーを受講できたこと、大変嬉しく思っております。また、新型肺炎流行の最中においてもオンライン開催を採用し、この様な機会を設けてくださった新潟大学歯学部同窓会の皆様にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

私は現在、社会福祉協議会の職員として障害者の自立支援に従事しています。やはり高齢者、障害者の口腔内の問題には思うところが多く、その一方で歯科以外の日常生活上の支援をするのが精一杯というのが現状です。歯科衛生士免許を取得している社会福祉士としてなにか気付けること、できることはないかと思い今回のセミナーを受講させていただきました。

セミナーでは、福島先生がお住まいの80歳代人口が最多という“超高齢化先進地域”において、医療従事者、もしくは福祉職員の人数に限られる中、地域住民の歯の健康を守るための考え方や方法を学ぶことができました。

特に社協職員として興味深かったのが、福島先

生の診療所と併設している高齢者施設と連携し、送迎サービスを組み合わせた歯科診療を行なっていることです。通常は歯科医が施設や自宅へ訪問し治療することが多いと思います。サービス提供者が少ない以上、訪問日の調整、訪問先での器具やスペースの確保の問題、患者や家族の負担などを軽減する方法として送迎治療は非常に有効だと思いました。

また、福島先生は患者の口腔内のみならず患者の生活や人生を含めて診察していると感じました。患者に負担をかけないよう通院回数が少ない治療法を選択すること、材料に余命以上の耐久性は求めず臨床操作性を優先すること、う蝕の予防・進行の抑制をはかることなど、人生を支える歯の治療を行っており、それは必ずしも口腔内の完治を目指せばよいものではないということが伺えました。

―無歯顎で生まれ、無歯顎で死ぬことは歯科の敗北とは言えない。―

万人に対し教科書通りのサービスを提供するのではなく、対象者の生活にとって一番重要なことはなにか、よりよく人生を送る方法はないか、私も日々の業務の中で模索していきます。

最後になりますが、卒業した後にも学ぶ機会を与えてくださった同窓会の皆様に改めて感謝いたします。またインターネットを介さずに直接お会いできる日を楽しみにしております。





歯学部を支える方々

歯学部 to 異動して

歯学部事務室長 近藤 正一

平成31年4月1日に脳研究所事務室長から歯学部事務室長に異動してきました近藤正一と申します。平成4年11月に公害等調整委員会事務局（現在は総務省の外局）より新潟大学に出向してから、本学での勤務も早28年となりました。財務部、医歯学総合病院（管理運営部門）、脳研究所事務室と学生・院生の皆さんに直接対応しない部署での勤務が長く、直接対応する部署は人社系（2年間）と今回で2度目となります。歯学部異動3日目の4月3日に本学の入学式に「初めて」同席させてもらい、その流れから後援会総会・保護者懇談会の受付、新入生懇談会の司会進行へと目新しいことを経験し、その後も、学年暦が進む中で新鮮な感覚を持ちつつ業務・行事等に対応してきました。

異動して1年半ほど経過しますが、歯学部の大きな特徴として感じていることのひとつが「学部全体の一体感」です。学部長のリーダーシップの下、ミッションの再定義で挙げた4つの強み・特色に向け、先生方全体が教育・研究・地域歯科医療にと熱心に取り組まれています。また、事務に

対しても協力的なご対応を賜り感謝いたします。事務室としてもこの一体感の中で先生方との良好な環境を継続しつつ事務的支援を行っていきたいと思います。

二つ目が、「国際交流」に力を入れていることです。部局間交流協定等の締結、海外での医療支援事業・国際シンポジウムの実施、短期海外派遣プログラムによる学生の派遣、海外大学院生等の受け入れ等々、年間を通して何かしら行われ、事務的支援も多種多様に先生方と調整のうえ対応させていただいております。令和2年2月のインドネシアで開催した国際シンポジウムでは事務室からの事務支援者3名の一員として同行し、英語はできませんが参加された先生方から色々ご配慮いただき良い経験をさせていただきました。残念ながら同年3月以降新型コロナウイルス感染症対策のため海外渡航などの人の行き来ができず、リモートでの交流等へと活動が縮小していますが、この状況が早く改善され、以前のように活発な人の交流が再開されよう願っています。

一あしずつ

歯学部事務室総務係 五十嵐 未来

歯学部総務係の五十嵐と申します。

令和元年10月に入職・歯学部配属となり、1年と少しが経ちました。

伝票処理や契約、出張の手続き（現在は新型コロナウイルス感染症の影響で殆ど無くなってしまいましたが…）など、主に会計業務を担当しております。

高校生の頃から教育に関する仕事に就きたいと考えていたため、間接的に教育や研究のサポートができることを嬉しく思っています。

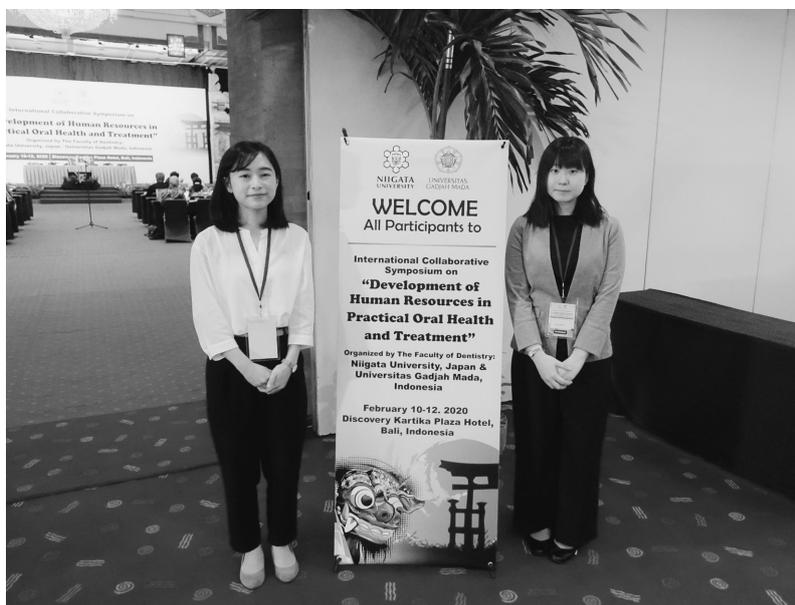
私は宮沢賢治が好きで、昨年、新型コロナウイルス感染症の流行で戸惑いや不安を感じたときには、『銀河鉄道の夜』の中の「なにがしあわせか

わからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがたどしいみちを進む中のできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」という言葉思い出して、元気を出していました。

今年は昨年よりも沢山の「一あしずつ」を重ね、先輩職員のように先生方から頼っていただける職員になれるよう、精進したいと思います。

先生方のお力になれるよう知識を増やしてまいりますので、会計面でご不明な点がございましたら、お気軽にお声掛けください。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



コロナ禍で写真を撮る機会がなく、昨年2月に随行させていただいたシンポジウムの写真です

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	R2.9.30	上原文子	医歯学総合病院医員	包括歯科補綴学分野特任助教
退職	R2.10.31	伊藤晴江	医歯学総合病院講師	歯周診断・再建学分野助教
任期満了	R2.11.30	高波里帆	医歯学総合病院特任助手	摂食嚥下リハビリテーション学特任助手
任期満了	R2.11.30	後藤理恵	医歯学総合病院特任助手	摂食嚥下リハビリテーション学特任助手
退職	R2.12.31	加来咲子		歯学教育開発室特任助教
採用	R3.1.1	高波里帆	摂食嚥下リハビリテーション学特任助手	医歯学総合病院特任助手

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	R2.9.30	飯田麻美子		歯学部事務室総務係（育休代替職員）
採用	R2.10.1	椎谷亮子	歯学部事務室総務係派遣職員	

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	R2.9.1	中 村 太	歯科総合診療部助教	歯科総合診療部医員
採用	R2.10.1	曾 我 麻里恵	医療連携口腔管理治療部特任助教	歯科放射線科医員
退職	R2.10.31	石 崎 裕 子		歯科総合診療部講師
昇任	R2.11.1	伊 藤 晴 江	歯科総合診療部講師	医歯学系（歯周診断・再建学）助教
退職	R2.11.30	坂 上 馨		矯正歯科助教
採用	R2.12.1	高 波 里 帆	口腔リハビリテーション科特任助手	摂食嚥下リハビリテーション学特任助手
採用	R2.12.1	後 藤 理 恵	口腔リハビリテーション科特任助手	摂食嚥下リハビリテーション学特任助手
任期満了	R2.12.31	高 波 里 帆	摂食嚥下リハビリテーション学特任助手	口腔リハビリテーション科特任助手
採用	R3.1.1	大 森 裕 子	矯正歯科助教	矯正歯科医員

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
育児休業	R2.9.2	遠 藤 七 瀬		東3階病棟看護師
採用	R2.10.1	高 田 綾 美	歯科衛生部門歯科衛生士	
所属換	R2.10.1	藤 野 あかり	東3階病棟看護師	東6階病棟看護師
育児休業	R2.12.18	尾 淵 真 未		東3階病棟看護師

編集後記

年未年始のお忙しい時期にも関わらずご快諾いただき、ご寄稿いただきました教職員ならびに学生の皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げます。また、編集長の辻村先生におかれましても私の不十分な編集のために多大なる迷惑をおかけしましたが、的確にとりまとめていただき、心より感謝申し上げます。今回初めて歯学部ニュースの編集に携わり、いかに大変な労力の上で出来上がっているのかを知りました。この雑誌が新潟大学歯学部に関わる皆様に役に立つ何かをお伝えできる一助になれば幸いです。

顎顔面口腔外科 上野山 敦士

まず初めに執筆にご協力いただいた先生、学生さんに深く感謝申し上げます。特に「卒業生から」を執筆いただきました学生さんは、国家試験直前の時期にもかかわらず快諾をいただき、大変ありがとうございました。私はこの度、初めて編集に関わらせていただきましたが、年に2回発行のこの冊子ができあがるために多くの人が尽力していることをあらためて実感しました。今年はコロナウイルスの問題で、大学の状況が心配なご家族・OBの方が多かったかと思えます。本冊子が少しでも心配を解消する材料になることを願っております。

う蝕学分野 枝並 直樹

まず、年未年始のご多忙中執筆を快諾していただいた皆様に心より感謝申し上げます。昨年コロナ禍により物事がいつも通りにできないことが多いと思います。今回の歯学部ニュースでは、コロナ禍によって変化した学生生活や授業について多くの寄稿をいただきました。コロナ禍に対応するための様々な工夫と努力を知っていただくことで、皆様の新たな生活様式への工夫に役立っていただけたら幸いです。

歯科矯正学分野 大竹 正紀

最初に、ご多忙のところ原稿執筆をご快諾頂きました皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。歯学部ニュースは学生のみならず教職員も良い刺激を受ける素晴らしい冊子だと思います。臨床・研究・教育全てを網羅しており、その情報量と質のなんとことや！！（私の出身大学にはこのような素晴らしい冊子はありませんでした）。そのような歯学部ニュースの編集に少しでも携わることができ大変光栄でした。ありがとうございました。

摂食嚥下リハビリテーション学分野 那小屋 公太

この度、歯学部ニュース138号の編集長を担当させていただきました。現在、新型コロナ第3波の真ただ中で、この原稿を書いています。多くの行動制限が求められているなか、新潟大学歯学部では様々な工夫をしてコロナ禍に立ち向かっています。そこで今回は“コロナ禍の授業”という特集を組み、学務係から教育全般について、3講座の先生方から教育における取り組みについてご紹介いただきました。本号を通じて、少しでも本学の様子を知っていただけたら幸いです。ご寄稿くださった皆様、編集にご尽力くださった諸先生方、編集委員に心から感謝申し上げます。

摂食嚥下リハビリテーション学分野 辻村 恭憲

歯学部ニュース

令和2年度第2号（通算138号）

発行日 令和3年3月30日
発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 辻村 恭憲、魚島 勝美
編集委員 上野山敦士、枝並 直樹
大竹 正紀、那小屋公太
印刷所 (株)ウイザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮影地：白山神社（新潟市）

撮影日：2021年3月

使用機材：SONY α900（DSLR-A900）／Distagon T* 24mm F2 ZA SSM／
絞り：F2.8・シャッター速度：1,000分の1秒

裏表紙の撮影データ

撮影地：白山神社（新潟市）

撮影日：2021年3月

使用機材：OLYMPUS PEN-F／M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO／
絞り：F10・シャッター速度：400分の1秒

コメント：晴天下の白山神社の梅をほぼ同じフレーミングで、表紙と裏表紙とで異なるフォーマットで撮影してみました。どちらも35mm版換算で焦点距離24mmのレンズとなりますが、表紙は35mmフルサイズ（センサーサイズ36×24mm）、裏表紙は<マイクロ>フォーサーズ（17.3×13mm）です。これらは向き不向きがあるため適材適所にて使い分けられることが多いですが、今回はそれぞれの特徴をより際立たせるように、フルサイズでは絞りを開け気味に、<マイクロ>フォーサーズでは絞り気味にして撮影してみました。被写界深度（ピントが合っているように見える範囲）の違いにより、表紙ではピントの合った部分がごく浅いのに対して、裏表紙では背景もかなり見えていると思います。

本誌中の写真の使用機材

ボディ：SONY α900（DSLR-A900）・OLYMPUS PEN-F

レンズ：Distagon T* 24mm F2 ZA SSM・M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO

撮影者：林 孝文



リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。